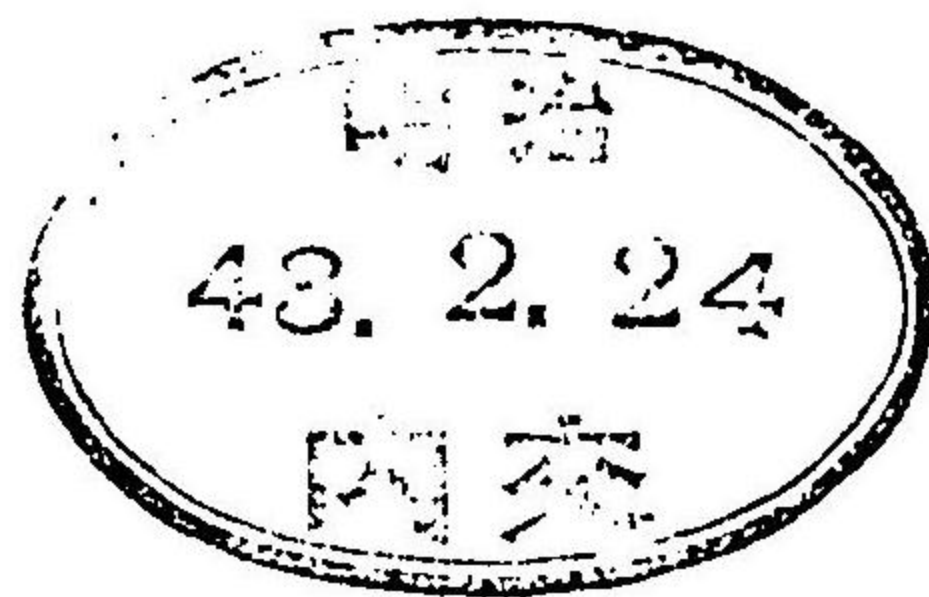


325-105

宮川經輝序

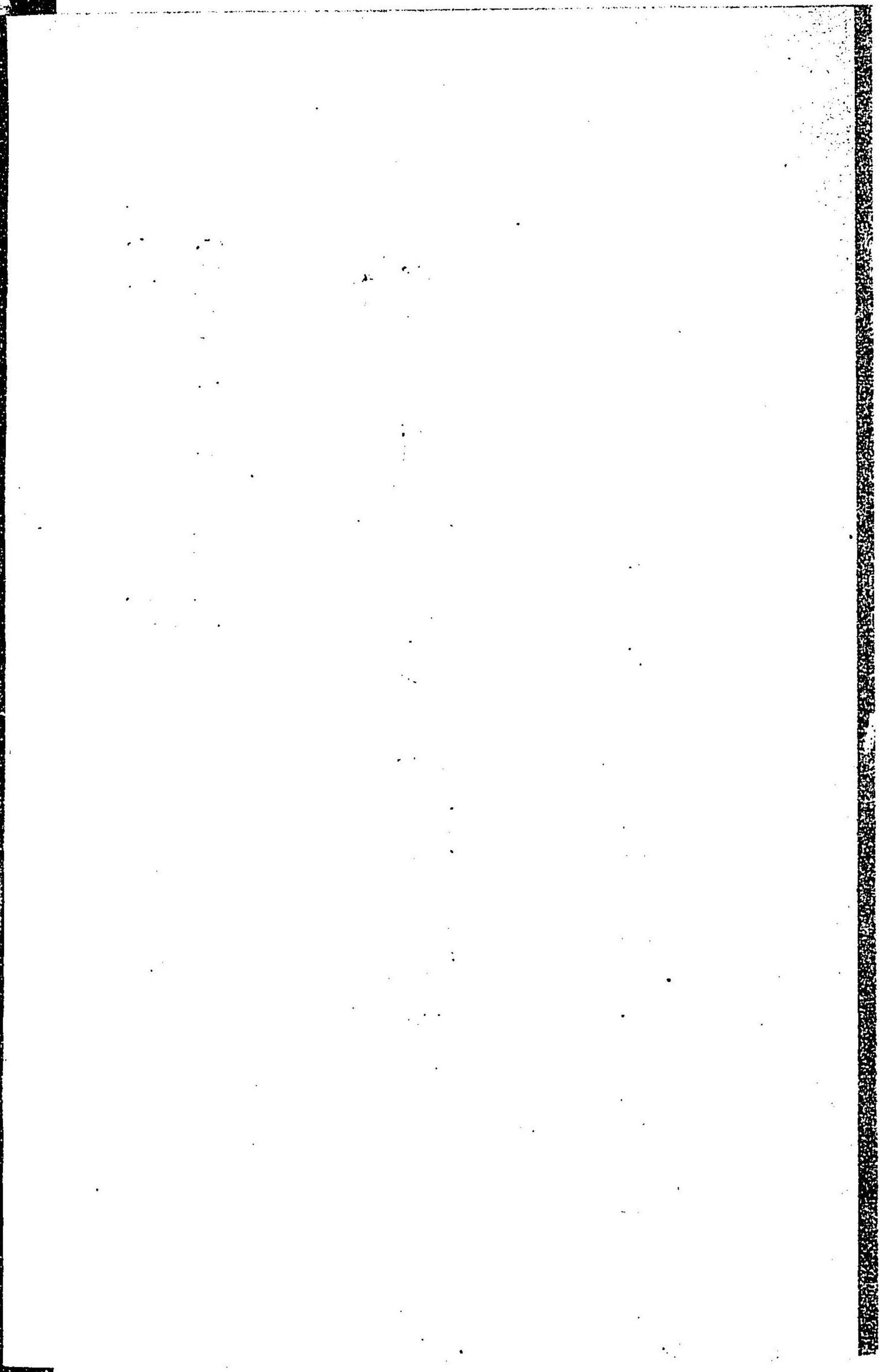
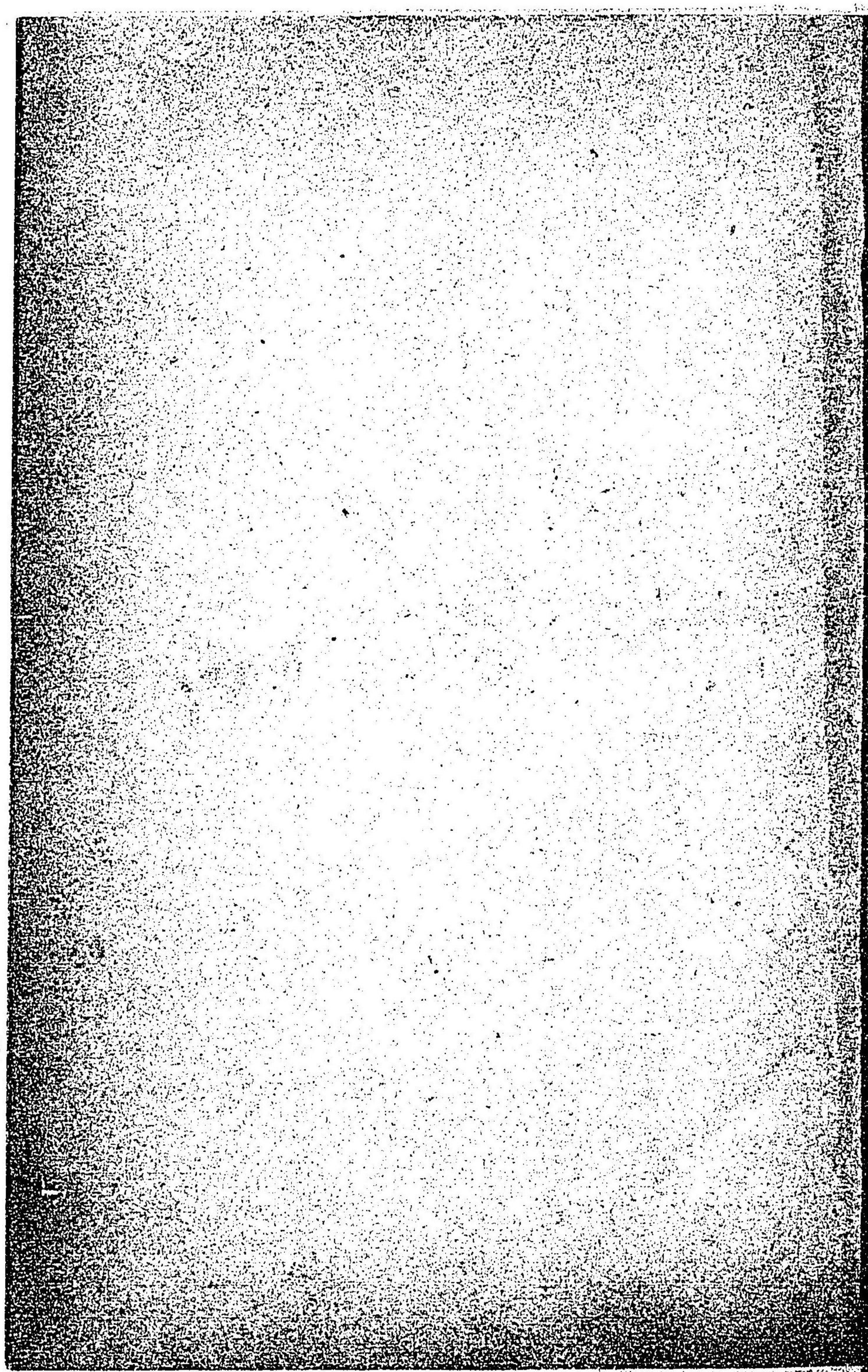
竹内甚吉遺稿

# 商人の宗教



東京 警 醒 社 書 店







商人たりし亡き  
父母の記念の爲  
此書を献げ奉る



## 緒言

燈火をかき立て見ればぬば玉の、暗き瑾さへ顯はれて、今更ながら、余が不文なるを耻るのである。

元來、文に習はぬ者なるに、去年の四月このかた重き病に犯されて、思の亂れ易く、筆の伸び難く、時としては、斯るものを公にせむは嗚呼の至りなり、一層のこと、引裂いて反古籠に葬ること、却つて罪は作らざるかと、其儘に打捨て置きたることも屢々であつた。然りながら、斯ては豫ての考にも背き、爲すことを爲さずして止むの他なき次第なれば、余



の心の満足せざるは勿論、神の聖旨にも適はざることならむと、復とり出して、漸く出来上つたのが、此商人の宗教である。

只神の祝福これに加はりて、世の道を求むる人のため、些かの助けともなり、縦し少数の人なりとも、神の恵に與るに至らば、余の光榮これに過るものは無いのである。

さゝぐるもげに恥づかしやみづからの

かきにごしたる水くきのあと

明治四十二年初夏

明石の浦にて

知足生誌す



## 商人の宗教目次

第一章	商人の宗教と題する理由	一頁
第二章	商人に無宗教者なし	七
第三章	宗教の本分	一一
第四章	商人道	一八
第五章	高貴なる實業	二四
第六章	運根鈍の裏表	二九
第七章	商人の人格	三六
第八章	銀行重役の嘆息	四一
第九章	トラストとポイユット	四七



第十章	富豪の子弟	五九
第十一章	混雜せる家庭	六〇
第十二章	家長の責任	六八
第十三章	神の存在	七五
第十四章	人生の事	八三
第十五章	罪惡とは何ぞや	九〇
第十六章	救主の事	九八
第十七章	キリストの人格	一〇五
第十八章	永久の生命	一一三
第十九章	聖書	一二一

# 商人の宗教

竹内甚吉著

## 第一章 商人の宗教と題する理由

表題を商人の宗教としたが、さりとて別に商人に限つた宗教がある理由もない、それにも拘はらず、殊更に商人の宗教と云ふのは、余の心中に商人に對する一種の同情があつて、どうかして、此宗教を商人諸君に勧めたいものだとの一念が、疑り固まつて、爰に顯はれたのである。

それは又何故かと問はると、元來余は商人の家に生れたもので



あつて、無論成人の後は立派な商人になしたいとの、両親の考で教育を授けられ、余も亦それが當然の事と考へ、幼少の頃から、某商家に入つて、相應の苦勞を積んだのである。ところが何時の頃よりか胸に一ツの謎が起つて來た、それは當時の商人の考が、余の小さな心に解せられないのである。彼等は一生懸命に金儲をする、而して金を儲けて之をどうするかと問へば、先づ立派な家倉を建てると答へる。それから又盛に商賣する、そこで復金が儲かる、スルト今度は別莊を造る、庭園を築く、其内に妾を蓄へる、それからどうする、どうも爲ない、遂に死ぬる、之が彼等の生涯の理想であつて、又彼等一般の状態であつた。併しそれが余にはどうしても解らない、然も其目的を甘く成就するものは百中一二にも足らぬ、其餘の多くは皆失敗に失敗を重ね、此毒虫の様な考の犠牲となつて行くのである。

る、現に余の朋輩の中にも此不幸に出遇つた者が少からずあつた。余の謎と云ふのは、即ち是である、併し之は今より三十年前のことで、今日の様に新聞や雑誌があつて、商人の目的や精神を導くでもなければ、演説や講演によつて商人道を示すでもない、そこで何を目的にして立つたら善いのか、さつぱり解らない、丁度暗夜に、燈臺のない海上を漂うて居る捨小舟の様なものである。まかり間違へば、彼等と共に放蕩の海に溺れなければならぬのである。或時は嗚呼つまりまらない世界だと嘲つたこともあり、又否々世間や人が悪いのではなく、自分が解らないのであらうと、我と我身を恨んだことも屢々であつた。而して己の言語や行狀を省みれば、放蕩こそせざれ、矢張彼等と何の違ひもないのである、さても情けない事である、煩悶に煩悶を重ねて、遂に失望の淵に陥つてしまつたので



ある。

丁度此時分キリスト教が我地方へ入つて来た。然るに余は之が大嫌ひで、名だけ聞いても身振ひする位であつたにも拘はらず、不圖したことから此道が我が胸中の謎を解くものではあるまいかと考へし、之を研究する心になつた。初めの内は容易に解らなかつたが、研究して居る内、次第に其教の意味も解る様になり、遂に其信者となつたのである。

是に於て、どうか此宗教を以て凡ての人を救ひたい、殊に商人を救はねばならぬと云ふ熱心が起つて来た、そこで斷然決心をして、キリスト教研究のため、京都同志社の神學科に入つたのである。數年の勉強を卒へて、いざ卒業と云ふ時が来た、此時も余は相變らず、商人への傳道を己が使命と思つて居つたので、一日故新島先生を訪

うて、商人への傳道に就て心得となるべきことを承つたのである。

然るに先生は、いと平然たる態度で答へらるゝには、「商人への傳道として別に秘密もあるまい、要するに只キリスト教を、有の儘に説けば夫で善からうじやないか、現に米國のニューヨークやシカゴの如き大都會に士族と云ふものは一人もあるまい、皆實業家と云うても善い、然しキリスト教は益々たる勢で張まつて居る、君が幸に此精神で傳道をしてくれることは、誠に喜ばしいことである、我が同志社も行く／＼は商業學部を設けて、商人を救はねばならぬ、商人が眞の神を信ぜぬ内は、日本の前途は寒心に堪へぬのである云々」と語られた。

是に於て余は一層此考を固うし、及ばずながら今日まで盡して来たのである、只不肖にして微力なる、思ふ様に其効果を收むること



の出来なかつたのは、何處までも恥入る次第である。

さて、今日は商人の考も進み、其理想も高くなり、従つて公共的事にも、又慈善的事にも其他百般の事が、大進歩を遂げて來て、之を三十年前に較べて見れば、まるで別天地の感がある、實に今更ながら、御世の惠の忝けなきを感ずる次第である。去りながら、斯く變化し、斯く進歩したる今日は、最年余の胸中の謎は解け去つたであらうか、否決して然うでない、まだく依然として存して居る。否々益々凝り固まつて來たのである。それは又何故かと云へば、變るくくと云ひつゝ、變らぬものは人の心で、若し、精神的、道德的問題に立入つて見るならば、今日と雖も人心の悪疫は大流行であつて、之に罹らぬものは誠に稀であることを知るのである。消毒は如何、豫防はどうだと思ひ廻らす時は、眞に懸念に堪へぬ

ものがある、そこで不肖を省みず、敢て商人の宗教と題して此書が諸君に見ゆる譯である。萬一にも、此書が諸君の幸福の一助ともなるならば、余の満足、光榮是に過るものはないのである。

## 第二章 商人に無宗教者なし

却説、以上の如く申しますると、或方はイヤもう宗教などは、我吾商人には必要は御座らぬ、と一言の下に跳ね飛ばして仕舞はれるかも知れぬが、さう云ふ人にも事實宗教はあるので、余の觀察では商人に無宗教者は無い様に思ふ。何故なれば、彼等は朝には拍手を打ち、神棚に向つて富貴繁昌を希ひ、夕には佛壇に珠數をつまぐつて瞑福を祈るではないか、之がどうして無宗教者と云はるゝであらう、又彼等の御祭騒ぎを見、彼等の御祝騒ぎを見れば、どうして之



が無宗教者と思はれやう、又彼等は宮寺に或は幟を献じ、或は提灯を奉るのである、これは只商賣の廣告のみではあるまい、眞に之によつて永代其家に幸福が来るものと考へて居るのである、更に進んで彼等の身上に就て觀察を下して見るならば、彼等が病氣危篤と知るや、乍ち加持祈禱代參御百度參りの混雜は實に甚しいものではないか、殊に彼等が最後の花とも云ふべき葬式に之を見るときは、それは、昔の大名の行列も、斯くやとばかり思はしむるものも少くはない。これをも無宗教の人であると云へるであらうか、狂人で無ければ決して然うは云ふまい、成程彼等とても、時には口に神佛の悪口を云ふ事もある。併し心には南無阿彌陀佛を唱へて居る。其胸中には神佛の祐助を願うて止まぬのである、彼等は日毎に其御恩澤を受けんことを希ひ、之を受けざる時は、己が信心の足らぬを恐る

るのである、どうして大膽に無宗教を主張することが出来やう、然れば彼等は宗教無用論者ではない、寧ろ宗教熱心者であると云はねばならぬ。

そこで又一ツの議論が起つて来る、それは斯うである、既に商人として各宗教を持つて居るとすれば、何ぞ今更事新しく、之を聞く必要があらうか、と云ふのである。成程それは一應最もな議論である、併し余が爰に云ふところの宗教は、諸君が今日まで持つて居られるものとは、大に其趣を異にして居るのである、これが諸君に聞いて貰ひたい點である。若し前申す様な宗教で事が足れば、余も子供の時から、夫は持つて居つたのである、加之、余は其宗教の熱心家であつた、ところが其熱心家が、其宗教の恵に與ることが出来ずして、却つて前章に申した如き煩悶を惹起したと云ふものは、抑々



何故であらう。

その重なる原因は、ヨシヤ己は宗教熱心家であつても、肝心な其宗教が余の精神上の希望と道徳上の考に添はなかつたからである。それも其等、其宗教なるものは、俗人の玩具同様になつて、お祭騒ぎや葬式のお供が關の山であつた、斯んなことで、どうして精神的問題や道徳的問題を解決することが出来やう。之に依頼する者の遂に絶望に陥るは、又止むを得ざる結果である。

元來宗教の本旨と申すものは、もつと高尚な所に存する筈である、夫を、單にお祭騒ぎや、葬式や、加持祈禱位に止めて終ふとすれば、最も大切な精神的問題は、何が之を解決するのであらう、宗教を措いて、斯かる問題を解く大切な役目を果たすものが、何處にあらう。さあ、斯う考へて見ると従來の宗教は其本分を盡して居ない、唯

僅かに枝葉の問題にのみ拘はつて居つたことが解るであらう。然うして見ると、眞に宗教の本分を盡す宗教が必要ではあるまいか、機を見ることに鋭敏なる商人諸君に於かれては、もう多言をせずとも之でお解りになつたこと、思ふのである。

### 第三章 宗教の本分

宗教の本分は、人の精神を支配するものであると申しましたが、夫に就て又異論を唱へる人がある。

其説に由ると、宗教に頼らずとも精神的修養は出来ると云ふのである。成程余とても、其説を全く否認はしない、或は無宗教で其精神を修めて行く人も、偶には有るかも知れぬ、佛し余の説は、一般普通の事柄を云ふのであつて、百人に一人や、五十人に一人、稀に



やり得る様な、危い事を云ふのではない、余が爰に云ふところの宗教の修養をするならば、最も多くの人、最も早く、最も容易く、其精神を修めて行くことが出来、有用なる活ける人物となることが出来るのである、そこで他にも方法は無いとは申さぬが、「急がば廻りはれ勢田の長橋」で、諸君が爰に心を運ぶのが一番安全の道である、而して其精神的の宗教の働くに二ツの方面があると思ふ。

其一ツは人の成功と云ふ方面である、由來宗教と申すと、世捨人の信仰するもの、如く思はれて居つたが、之は大なる間違であつて、眞の宗教の目的は、決してそんなものではない、先づ其精神を修めしめ其道徳を行はしむるが、宗教の本分であつて、此世を渡る生活の上にあつて、宗教は恰も花役者の如く働かねばならぬ。それでこそ人を成功せしむる教ともなり、力ともなつて、其人を活動せしむる

ことが出来るのである。

今日は成功論の八ヶ間敷い時であつて、既に諸君も其議論は耳にして居らるゝであらう、併し余の感ずる點は、宗教に據らぬ成功論は、十人が十人に應用の出来るものではない、否甚しきは根の無い木に花を咲かせた様なもので、却つて之によつて多くの人を誤らしむる様なことがあるのである。着實な成功は矢張精神的修養がら来る期だと思ふ。

其次には失敗の方面からも、宗教の働を考へて置きたいと思ふ。勝つことのみを知つて敗るゝことを知らぬ將軍は危険千萬である、戦へば負けることもあり、商賣すれば損をすることもあり。其他此世を渡るには一より十まで成功々々でやれるものではない。そこで我々は時に失敗があつても、之に屈せぬ力の源を、知つて居らね



ばならぬ。

人の一生には成功と思つたことが、却つて其人の後の大成功を妨げ、遂に平凡な人として畢つた實例も少くない、之に反して失敗と思つたことも、其人の遣り工合で、存外之が將來大成功の踏段となつて、残りの生涯は、目出度く千秋樂を舞終めた人も亦少くない。故に成功ばかり夢想して居つて、失敗の來た時に腰を拔さぬ様、平素から用心する事が大切である。

多くの成功論は蜂蜜の如く甘くして、人々を空想の夢に酔はしめて居るが、失敗の教訓を與へない成功論ほど恐るべきものはない。お天氣の好い時に雨具の用意を忘れてはならぬ、眞の宗教は此點に就て、諸君の友人である、我等の失敗と思ふ時に靜思を與へ、慰安を與へ、能力を與へて、悲哀や、失望や、恐怖から救ふものは此宗教である。

教である。

以上述べた通り、宗教は二方面に働くものであるが、爰に精神的に働くと申す點に就て、今一言を述べて置きたい。さて此宗教の働きの、根據と云ふものは、信仰であるが、其信仰と云ふものは、人の心の奥に潜んで居る向上心と云つて、高さに登りたいと絶えず志す力の働である、若し人たるものに此力のない時は、人と申す事は出来ぬ、丁度鳥が空中に飛び揚らんとする様に、人にも高さに上らんと志す、此向上心があるのである。若し鳥を捕へて、飛ぶことを制へて置くならば、其鳥の力は衰へて、遂には飛ぶことの出来ぬ様になるので、彼の鶏や家鴨は其著しき例である。人の心も亦此通りで、此向上心を善く導き、又善く發達させる事をせないならば、此貴き力も何時しか衰へて、墮落し只下等なる事のみ、望を置く



様になるのである。

宗教は此最も高尚な心の働を導いて、最も高尚な所に到らしむるものである、之が即ち信仰と申すものである、此信仰の働によつて其精神を修めるのが、所謂精神的修養であつて、精神が修まつて來れば、品行の治まるのは當然の事である。此品行が美しく治まつて行くのを道徳的修養と云ふのである。

然るに世人は之を分離して、只品行の方正とか、精神の堅固とか申して居るが、それは本末を誤つた議論で、余は不自然極まるものと思ふ。

抑々宗教と申すものは、天地間の最も大いなる又最も恩恵ある神様と人間とを結び合はす働をするものであつて、此二ツのものが結び合ふことによつて、強き神の力が人間に通ひ、賢き神の智慧が人

間に来り、其人をして是迄覺えたことの無い幸福の境涯に導くのである、譬へて之を云ふならば、宗教は人間と云ふ花嫁と神様と云ふ花婿とを、結婚せしむる仲人である、而して神様と人間とが結婚するのを信仰と云ひ、其結婚の結果生れ出づるものを、正しき品行と稱するのである。

斯うして見ると、宗教に因る道徳的修養と申すものは、六ヶ敷い規則責めで身を修めるのとは大違で、至極容易なる方法によつて我々に精神的并に道徳的の修養を爲さしむるものであることが解るであらう、誠に簡便にして、多忙の中に活動する商人諸君にとつて最も適したる修養法であると思ふ。



#### 第四章 商人道

近時武士道と云ふことが八ヶ間敷くなつた、其重なる原因は、日露戦争が見事に勝を得たのは何の理由であらうか、と云ふ研究が盛になつて来た結果、遂にそれは日本固有の武士道があつたからである、と云ふことが解り、且つ雷に御互日本人が然う思ふばかりでなく、外國人迄が此點を大いに認めて来たからである。

さて、武士道と申せば、只昔の侍士即ち士族のみが持つて居つた様に聞えるが、決して然うではない、其證據は、陸海軍にしても決して士族ばかりが出て居るのではなく、漁夫の息子もあれば、百姓の息子もあらうし、町人の息子も出て居るのである。其兵士が強く、其兵士に武士道が存すると云ふのであれば、其武士道なるものは、

決して士族の息子ばかりが占領すべきものでないことは、爰に云ふまでもなく明かなことである。加之戦争は軍人ばかりで出来るものでなく、實に舉國一致でやつた仕事である。そこで余は思ふに、此武士道と云ふものは、何時の頃からか日本國民全體の精神に這入り込んで居つたもので、それが爲めに此大勝利が得られたのである。

却説、余は此武士道が戦争の時に、斯く見事に働いた様に、何故今の實業界には働かぬであらうかを怪むのである。戦争には勝つた、世界は日本と云ふ國が日の出の勢で頭を擡げて来た。之は御互日本人にとつては此上もない賀すべきことである。ところが諸君、どうである、其萬歳の聲未だ終らざるに、實業界には正反對の敗北の聲が立つて、何方を見ても其方向に行きなやんで居る者に充ちて居るではないか、抑々これはどう云ふ理由であらうか、勿論諸君には一



々明かになつて居るに違ひない、又これが解らぬ様では今日の商界は立つことは出来ないのである。

併し余は爰に、余の見たと所に就て一言述べ見たい。斯の如き敗北の聲が何故起るか云ふに、此武士道の精神を戦争に於て活用した如く、實業上に應用することが缺けて居つた結果ではあるまいか、之は誠に惜むべきことであつて、切角尊貴なる資を持つて居りながら、之を應用しないのは所謂資の持ち腐れである。而して其結果は實に怪むべきことが現はれて居る、たとへば、戦争と云へば死をも怖れざる勇氣があるのに、商業上には此意氣込がない、却つてやゝもすると、生命あつての物種と云ふ考から、兎角引込主義となるのである。此れは實業上の大缺點で、これでは實業が大發展を爲ぬのも當然である。勿論人の生命は大切なるものであつて、輕々

しく之を擲つべきものでないことは、云ふまでもないことであるが、凡そ人が生命がけになると云ふことは、即ち一生懸命になることであつて、そこに眞面目な働が起つて來るのである、そこ迄行かねば大事はやれるものでない。然るに精神爰に至らず、實業のことは大抵にやつて置くこと云ふものは、從來實業家に高尚な目的——己が生命をも打込んでやると云ふだけの高尚な目的が無かつたからである。即ち武士道の如きものが無かつたからである。つまり、人は高尚ならざること、生命は捨てられぬから眞面目を缺いたのであつて、之は寧ろ當然の事と思ふ。

此故に今後の實業界に立たんとするものは、宜しく商人道と申すことを考へ、ヨシヤ己の生命は失ふとも、此ことは遣り扱かねばならぬ、之を遣らねば國民として義務が濟まぬ、否人間として生れ甲



斐のないものである。と云ふ様な高尚な考を以て、遣つて行かねばならぬと思ふ。此反對に、若しも戦争には武士道が働くが、實業界にそんな高尚なものは無い、と云ふ様な事であるとすれば。其實業界はどうして世界の舞臺に飛躍することが出来やう、それこそ戦はずして敗北するは必定である。尙何時までも斯る状態であつたなら、比較的商人道の修められた支那人にさへ頭は上るまい、況んや汝々として修養を積みつゝある歐米人に於てをや、否々外國人を待たないでも、諸君の同胞が輕視するのである。

試に懐へ、古の町人と申すものが何彼と云へば、御用金と稱して多額の金を絞られながらも、士農工商と云つて社會の最下級に置かれ、如何に多くの人々から賤められたかを。勿論これには社會の誤解もあつたらうが、要するに、商人には高尚な目的、道德と云ふも

のが缺けて居り、商人と云ふものは只金を儲ける道具か、金銀を蓄へ置く千兩箱か、但しは倉庫位に過ぎぬものと考へられたからである。而してアレは商人で御座る、アレは素町人で御座ると蔑視せられたのである。然し之は過去の御話としたところで、今後とても、商人の精神高尚ならず、商人の目的貴からずとせば、更に變りはあるまい、矢張一種の侮蔑を受くるは自然の勢であらう、先哲の言にも「自ら侮つて人は是を侮る」とある様に、如何とも仕方はないのである。

所が幸に今日は商人道が稱へらるゝ様になりつゝあり、又商人諸君に於ても、漸次自重の精神が起りつゝあるので、誠に目出度きことと思ふ、是余が商人道に就て爰に一言を費す所以であるが、さて其商人道には、如何なる教訓が含まれて居るかを考へて見度い。



## 第五章 高貴なる實業

商人道は如何なる教訓を以て我々を導かんとするか、是は其道の心得ある人に聴きたい點であるが、余の考ふる所は先づ高尚なる目的を立てることである。今更申す迄もないが、職業そのものに貴賤の區別のあるものではない、如何なる職業でも、職業それ自身は皆尊いものである。人の見て以て賤しとするものも、之をやる人がないならば、忽ち我々は大困りをするのである、どんな職業でも、皆我々に代つて、我々のする仕事をやつて呉れるのであつて、どうして之を賤めることが出来やう。

會て余の宅に毎日の如く来る魚商人の老人があつた、此老人は數里の遠方から商にやつて來るのであつたが、或夏の午後、余も又數里離れた所に行き、其歸るさのことであつた、丁度此老人が、炎天焼くが如き街道を、漸く其日の商賣を濟ませて、勞れ果てたる足を引ずる様に運びながら歸つて行くのを見た、余は車上から之を見るや、一種云ひ難き敬虔な心が起つて來て、此老人が拜みたくなつた、此老人は是我が爲に働いて居たのではないか、あゝ忝けないと、心に其勞を謝さざるを得なかつたのである。

然れば深く考ふるときは、職業は如何なるものにも高貴なるものである、只之を營む人の精神が賤しければ、其職業も亦賤しくなるのである。

實業に於ても亦然りで、之が高貴となり、神聖となるならぬは、全く其精神如何によるのである、只金を儲けて衣食住に満足すると云ふが如きは、其大目的ではない、我が商賣するは軍人が敵の陣頭



に立つと、更に變りはない、共に國家のために働くのである、我が  
駈引は軍略であつて、我が手の十露盤は刀劍である、我もし敗北せ  
ば、此の帝國の經濟を如何せむ、と云ふ覺悟が常に無ければならぬ  
そこで初めて、日々眞劍勝負をやることが出来るのである。若し此  
精神が無いならば、身に百萬の富ありと雖も、其人の精神は赤貧洗  
ふが如き者と撰ぶ所は無いのである。其反對に、ヨシヤ未だ成功も  
せず、大儲をせずとも、此考のある人は眞の實業家である、余は斯  
る人こそ、眞に尊敬すべき人であると思ふ。斯る人の遺口は一般の  
人とは餘程違つて居らねばならぬ、小刀細工で、何でも彼でも儲け  
さへすればよいと、正も不正も顧みない様な連中とは、大いに違つ  
た點があるに相違ないと思ふ。

余の知れる青年が某商店に入らんとする時、初めて其主人と會見

すると「君はどうして金を儲けるか」と問はれた、而して其答を終  
ると、更に又「其儲けた金はどうして費すか」と問はれたさうであ  
るが、余は此事を聞いて甚だ愉快に感じたのである。  
眞正の商人は先づ其儲け方を質さねばならぬと思ふ。或銀行の職  
員が其臨終に於て、其子女を枕邊に集め、若干の金を分ち與へて云  
ふには「これは多額の金と云ふ能はず、去りながら此中更に不義のも  
のなし、安んじて受けよ」と云ひ終つて瞑目したさうだが、之が眞  
正なる實業家の一例である。斯る人が額に汗して儲けた金ほど貴重  
なものはあるまい、又今も云つた様に「君はどうして其金を費すか」  
とは是亦商人の目的の大部分である。斯る人には商業それ自身が高  
尙なものとなつて居るのである。

其獲たるものを如何に費すべきや、と云ふことは其人の精神の高



下を判断する好き鏡である、彼のカーチギーの如きも、已が儲けた金をどう費すかに就て、あの賢き頭を痛めつゝあるではないか、其費し方を考へると云ふことは、誠に賢明なることであつて、又樂しきことである。或者は慈善事業、或者は教育事業、或は何、或は何と品定めは其人の好むところに従つてよいが、兎に角其金を費すに就ては、高尚な方法を考へ、其他には之を費さないと決心するのは誠に結構なことではなからうか。

斯の如き商人は其商業を高貴にし、其金儲を清くし、最後に社會に恩恵を施して、實業家の面目を高めるのである。余は之を商人道の目的と思ふ。

## 第六章 運根鈍の裏表

商人道の目的が前章に述べた通りであるとするれば、既に其根本問題に定まつたので、其基礎が置かれたのである。其他の教訓は此上に建築せられなければならぬ。爰で余は昔から商人の中に唱へられて居る運根鈍と云ふことを考へて見度い。

何事に限らず昔から云はれてある事には、一應の眞理はあるもので、此語の如きも、古人の實驗を示されたものであるが故に、今日に至るも猶廢たらないで、我國の堂々たる實業家の間に、善き誠として用ゐられて居る、所が此語はどうも消極的で、萬事控目にせよと教へる様に思はれる、積極的、進取的の氣象を缺いて居ると思ふ。併し余は之を宗教的に考へることにより、新たなる意味を引出す事



が出来るのである。

先づ運と申すことから考へて見るに、元來運と申すものは死物で何所からどうして來るか解らない、丁度海の上を漂うて居る大木の様なもので、何處に流れて行くか解らない、彼方に行くか、此方に來るか解らないのみならず、何時まで待つても遂に來ないかも知れないのである、夫を世人が何故に斯くの如く重んじたかと云ふと、實は運と云ふものを死物とは思つて居らなかつたからである、何か能力を持って、我々の上を見廻つて居り、此處らでもうよいと思つた時には、其處にドツサリ幸福を與へるものである、と云ふ風に考へられて居つたのである。所が其所が甚だ面白いのである、眞に我々の思ふ運命なるものは活きて居るのである。之を宗教的に云へば運とは神の思寵である。

神は幸福の無盡藏であつて、無量の富や寶に充ちて居るのである、而して此恵は何時までも神様獨りが御持になつて居る事を好み給はない、誰でもよいから、之を受取つて呉れるものゝあるのを待つて御座るのである、之が運である。

然らば此運はどうして我々のものとすることが出来るかと云ふに其處が娯みな問題で、我々の最も注意すべき點であるが、一口に云へば此運即ち神の恵を受くるには、其受くる人に用意が出来て居らねばならぬ、用意の無い人間が運の來るのを待つのは、怠惰である、迷信である、ヨシ斯んなことが他人の上にあつたとしても、それに眼を着けてはならぬ。「果報は燒つて待つて」で決して寝て待つてのではない、神は用意のあるものに運を下し給ふのである。用意とは何であるか、色々方面があらうが、一ツは己の智識と能



力の用意である。商人ならば其道に通達して、其事柄を取扱ふ手腕の煉れて居ることである。其用意には矢張相應の時日を置いて修養せねばなるまい。

次に大切なことは其人の信用である。人も天も此人の人物を認め、此人を信用して呉れねば、此運を握る事は出来ない、縦ひ其人の智識と能力が十分備はつて居つても、信用と申すものが備はらぬ内は、運の來るは愚か、不平々々で毎日を送り、却つて非運に生涯を送らねばならぬのである。之に反して信用如何に厚くとも、其人の能力と智識とが備はらなかつたならば、是又其人の運命は長い事もあるまい。

そこで能力と智識、それに信用と、此二つの方面が并び立つて來るのを用意が出来たと申すので、此用意の出来たところに運と云ふ

神の恵が下るのである。運は死物ではない、生きて居る、又諸君を活かすものである。

次に根と云ふことは辛抱強き事、即ち忍耐である。之も宗教的に考へて來ると、其根氣が一層力強いものとなるのである。人間ばかりの相手では六ヶ敷いことも、運命は生きて居るものである、と考へる時に、一ツの小さな忍耐も無益に歸するものではない、必ず己の福德となるのであると云ふことが解つて來て、如何なる辛抱もなすことが出来るのである。

それから第三の鈍と云ふことであるが、鈍と云つても愚かなことを云ふのではない、又わざと愚かな風をするのでもない、否それは鈍どころか、賢て過ぎるのである、そこで余は之を真正直と解釋する、ヨシヤ人からは馬鹿正直と云はれても、真正直にやることが鈍



である。

其處に至ると、矢張至誠であつて、只實業家ばかりでなく、人と  
して此心が無くば世に立てるものでない。古の人も天地神明に祈つ  
て此心を養うたのである。之は今日の商人道に於ても亦最も大切な  
る點であると思ふ。斯くして人と神との信用も備はるのである。

之が余の運根鈍の解釋である、併し前にも申す通り、之だけでは  
消極的である、尙是以外に必要な教訓があらう、たとへば機敏と  
云ふことの如き、最も大切な箇條であると思ふ。人を欺かぬことは  
鈍で守つて行くことが出来るが、人が欺くことは機敏でないならば、  
防がつくまい、余の友人に、相應の學識もあり、資産も有つて居る  
ものがあつて、田舎から大阪に出て来て或商業を初めた、彼は正直  
者である、決して人を欺く様な者ではない、然るに活馬の眼を抜く

とさへ云はるゝ活商人を對手にすることゝて、やゝもすると此對手  
のためと欺かれやうとする、否斯くの如き危険は毎日幾度となく迫  
つて來るのである、是に於て機敏なる彼は從來の方針を改めて、先  
づ落着いて此社會より實地の勉強をしやう、爰暫らくは儲けると云  
ふことに力を注ぐよりは、欺かれないと云ふことに骨を折り、徐々  
にやつて行かうと決心した、而して彼は今日かなりの成功をしたの  
である。之は機敏の修養を示すものでらう。

尙商業に大切なるものは勤勉である。如何に忍耐であり機敏なる  
も、此勤勉と云ふものを缺く時はどうであらう、其人の成功、不成  
功は問はずして明かである。不勉強、是商界の大敵である。

以上挙げた他にも、尙大切な教訓があらうが、余は爰に一々云ふ  
ことは避けやう、又それは其道の人に就て學ぶを賢しとするので



ある。要は兎に角、以上の如く商人道の教訓を立て、之を確守し  
嚴守する事が大切であると思ふのである。

## 第七章 商人の人格

今日の社會は何れの方面たるを問はず、人格と云ふ叫びを擧げて  
居るが、實業界に於ても亦同様である。

思ふに、如何に細密なる方法を講じ、如何にやかましく教訓を與  
へても、人格其ものが小さい時には大事業は遣れないのである、又  
人格の卑しい者には高尚な注文は出來ないのである。之は一般に  
いて云つたのであるが、實業界に於ても亦然りで、其進歩發展は  
に其人格如何によるのである。

更に之は事を遣る上に就て云ふのであるが、尙進んで考へると、

こればかりでなく事業成功の曉に於ても亦人格と云ふものが誠に大  
切なのである。基督教の聖書と云ふ經典の中に

もし人全世界を得るとも、其の生命を失はば何の益あらん乎

(馬太傳第十六章二十六節)

とあるが、よく此點を示されたものである。全世界を我がものとす  
ることは到底出來る事ではないが、之は無上の成功を云つたもので  
此上の成功はない、所がヨシこれほどの成功を遂げたとしても、其  
人格を打毀して仕舞へば己に何の益があらう。世には事業に吞まれ  
て、成功の外何物をも顧みぬ人がある、所謂鹿を逐ふ獵師山を見ず  
で、宗教は申すに及ばず、道徳も人格も、そんな事は云つて居る暇  
が無いと思つて居る、併し斯る人は何時か其心の寂しさに堪へぬ時  
が來ることに氣付かないのである。



要するに善事業も大成功も、所詮は人格によりて成就すべきものであると共に、又それらのものが人格を作る道となるのである、此點を忘れた人の生涯は殺風景極まるものである。

然れば善き事業を遣り、大なる成功をなすためには、善にして且つ大なる人格を養はねばならぬと共に、又それらの事業をなすのは各々人格を作る爲めであることを忘れてはならぬ、これでこそ事業の成功は其人格の記念碑となり、永遠に社會人心を活かすことが出来るのである。然して商人道の眼目も亦此に存すと云はねばなるまい、所で商人道に於てはどうして此大問題を解釋するであらうか、又どうして此人格を養成するか、之は容易ならざる難問題であらう。併し人は人から生れたるが如く、人格も亦人格によつて養成せらるゝの外に道はなからう。商人の大人格を生み出すには其商人社會

に、其人格の模範となるべき大人格を求めねばならぬ、之が商人道の大本尊となるのである。

西哲の言に「人は其崇拜するものに似る」とある通り、諸君の人格は其尊敬し、模範とする人に似て行くのである。爰に至れば此問題に實に緊急なる活事實であつて、一刻も忽せにすべきものでない事が知られやう、そこで余は諸君に尋ねたいと思ふ。

諸君は如何なる人物を諸君自身の活模範として尊敬し、崇拜して居るか、有名なるカトチキリであるか、或はロックフェラーであるか、或はロスチャイルド、或は森村翁、或は大倉翁、或は濫澤男、其他誰を指して之こそ我が理想とせる人格であると答へるか、斯くの如く問はるゝと、諸君も容易くは返答が出来まいと思ふ、何故かと云ふに彼等には巨萬の富あり、商界を料理するの腕もあり、何れ



劣らぬ豪の者には相違ないが、一長あれば一短のあるのは免れぬ所で、各其長所と共に短所もあるのである、我が理想の人格と崇拜するには惜むべき缺點を有つて居るのである。

さあ斯うして見ると、苟も缺點ありと知る以上、それを己の模範として崇拜することは出来まい、眞に敬服しないものを以て、之を崇拜せよ、之を模範とせよと云つても誰も之に従ふものはあるまいそれを好い加減にして置くから眞面目にもなれず、従つて其人格も發展せず、却つて此隙間から悪水が洩れ込み、大失敗を來す様になるのである。然らば商人道には本尊はないのであるか、然り、余は無遠慮に云ふ、今日の實業界には未だ商人道の本尊たるべきものを見出す能はずと。

然らば、どうしたならば此大問題は解決せらるゝであらうか、爰

に來ると矢張商人道が宗教と手を握らねばならぬのである。天下萬人の活模範として、尊敬に値し、崇拜するに足る大人格は宗教を措いて他に見出すことは到底出来ないことと思ふ、此點に就ては尙章を改めて論じて見たいと思ふが故に、今は只これだけ申して止むのである。

## 第八章 銀行重役の嘆息

余は今眼を轉じて、目下商人諸君の上に臨みつゝある實狀に就て、聊か考へて見たいと思ふ。

先づ第一に諸君の事務員又は手代として重用せらるゝ方々の上に、如何なる運命が手を擴げて居るかを語り度いのである、古語にも「小人罪なし玉を懷きて始めて罪あり」とあるが、能く



人情を穿つた語である。三千世界に之は悪人で御座ると、正札ついで生れ出たものとは只の一人もあるまい、それこそ石川五右衛門でも野口男三郎でも、産み落された時は玉の様な赤ン坊で、隣の老婆も向の奥様も皆聲を揃へて、御目出度う、と御祝述べたに相違ない、況んや産みの親の喜は如何ばかりであつたらう、實に福の神か天の使が舞込んで、も来たかの様に喜ばれたに違ひない、それが又何んであの様な不幸な人と成つたかと云へば、そこが御互の考へ所である。

よく人に知られた話だが、或る無邪氣な子供が黄金虫を糸で縛つて弄んで居つたが、不圖其黄金虫が錢箱の穴に這込んだ、引出して見ると天保錢を抱いて居る、此を見た子供は四方に人無さを幸と此錢を袂に入れたのがそもゝの過失で、其後は悪事に工夫を凝らす

様になつて遂に大盜賊となつた。

之が即ち玉を懐きて始めて罪ありと申すことで、斯う云ひつゝある我々にも、斯る機會が毎日幾度となく臨みつゝあるのである、之を誘惑と申すので、丁度鳥捕者が係蹄を掛ける様に、釣魚者が餌を投げる様に、我等の前にも危き誘惑が轉がつて居るのである、うかと夫れにかゝつたら最後、酷い目に會はねばならん、たとへば金錢の誘惑、飲食の誘惑、女色の誘惑、其他種々様々の誘惑があつて、之を取らんのは馬鹿らしいと思はせることが屢々ある、併し其玉を懐いたら大變だ。

先達も余が瀛車に乗つた所が、其處に七八名の紳士が乗つて居つて面白可笑して話の花を咲かせて居つた、聽て一人が正宗を口切ると他の一人はビールを扱く、列車中は一大酒宴場となつて、歌ふや



う踊るやら、大騒ぎだ、丁度花盛の頃であつたから、何處のステーションも大混雑をやつて居る、すると其中の一人がだしぬけに「ヤ、渡邊の大將が來て居る」と叫んだ、此聲を聞くと今迄愉快さうに踊つて居つた一人の男は、乍ら色真青になつて、何處に／＼と狂人の如くなつて狼狽て出した、一行一同も暫時ステーションの方を見つめて居つたが、他の一人が、なアに虚言だと肩を叩いたので漸く安堵した様子、大方酒の興も醒めて仕舞つたらうと見受けられたが、眼には金縁の眼鏡を掛け、身には粹なマントを纏ひ、其風體は一廉の紳士とより見えなんだが、實は手代方の秘密の遊山と解り、余は氣の毒にもあり、可愛想にも思はれたことである。

諸君は之を讀んで、何のこれしきのこと、珍しくも何ともないと云はるゝかも知れぬ、併しそれが實は困るのである、商家今日の風

習として此位の事は、珍しくもなく有勝のことであらうが、余はそれが懸念に堪へんのである、斯の如くして彼等の前途に流れ行く害毒は、遂に彼等を滅亡の淵に落とし込まねば止まぬのである。

余は此位で余り奥深くは立入るまいと思ふのであるが、諸君の重用せらるゝ人々の運命を思つては無頓着で居ることは出来ぬのである、そこで余をして覺えず涙を絞らしめた某銀行重役の嘆息を語つて、此項を結ばうと思ふ。

重役は語つて云はるゝに「私が此銀行に關係したのは、僅々三ヶ年此方であるが、其間には行員の失策と申すべきものはなか／＼澤山であつた、併し出来るだけは忍びもし、赦しもして來た、所が困つた事には、それを幸と悪心を増長して、遂に赦すことの出来ない不始末を出來すものがある、既に三名の前途有望なる青年を其筋の處



分に委した様な次第で、實に残念至極の事であり、又其父母に對しても氣の毒千萬、否社會に對して相濟まぬ次第であるが、どうも止むを得ないので云々」と嘆息せられたのである。

諸君は之を如何に感じ給ふか、マツチ一本で大火事は起る、此位の事と思ふ小悪が、遂に其人を滅ぼすのである、眞に慎むべきことではないか。

余は爰に諸君が己自身のためは勿論、斯る境遇にある多くの人の爲め、其精神的修養の必要なる事を、感ずるに至られんことを望むのである、そして如何なる誘惑が逼つて來ても、其れに打克つだけの修養をして戴きたいのである。聖書にも

謹慎め傲醒れなんぢらの敵なる惡魔吼ゆる獅子の如く徧行り

て吞むべき者を尋ぬ (彼得前書第五章八節)

とあるが、實に我々の周囲の危険千萬なる事を、よく穿つて居るではないか。

## 第九章 トラストとボイコツト

前章には事務員并に手代等其人自身のことには就て述べたのであるが、本章では其幸不幸が唯其人一個人にのみ止まらないで、遂には其會社又は其主家の盛衰に迄關するものであることを考へて見たい。諸君も知らるゝ通り、一人の善事務員によつて其會社の大發展を來し、一人の良番頭のために其家の繁榮を招くに至つた實例は珍しいことでもあるまい、實を云へば善事務員、良番頭を有する、と云ふことが其會社又は其家の大成功なので、之さへ得れば他は破竹の勢で行くので、最早大將を虜にしたも同然、此後は分捕品を集める



様なものである、能く世間で云ふことであるが、あの手代はあの家の金庫であるとは此事を云つたものである。

賢き主人は先づ此點に心を用ゐる、之を得た家は眞に幸福至極と云つてよからう、所が此反對に悪手代や不正の事務員を有する所は、丁度己の手で己の事業を打毀すのと同様で、此位不幸なことはない。此位は有勝の事、此位は不都合あるまいとの、危き安心の足下には、何時しか世人の不信を來し、尾に絡つけた悪評も持上つて來る、果は從來の御得意さへ手を引く様になるのである、とても新しい取引などは出来るものでない。

斯うなつて來ると獨相撲は取れないから、遂には自滅するに至るのである、又ヨシ自滅と迄は行かぬにしても、大失敗を來すに違ひなし。

數年前に或土地に一つの會社が出來た、其土地の人々は、此處に斯んなものを見て何をするのか、殆んど其理由を知るに苦しんだ程であつた、然も其會社は壹百萬圓と云ふ大資本を以て、着々其事業を進行せしめた、所がそれは某外國人とのトラストであつて、其外國人とは彼國で名高い富豪であることが解り、且つ其仕事は殆んど廢物利用と云つてもよい様なもので、其地方の人々が度外に見て居つたものを、原料とするのであつたから、後には誰一人其賢き著眼に敬服せぬものは無かつた。

然るにどう云ふ譯か、暫くすると其評判が悪くなつて來た、そして遂に其職工と村民との大激昂を來し、彼等は一夜の内に其事務所機械場、又は外國人の居室などを破壊してしまつた。

事務員は勿論、外國人等の狼狽は非常なもので、縣廳や外務省に



打電して、其鎮壓のため出兵を求めたほどであつた。併し幸にも其内、難なく治まつたので、そこまでの混雑は見ずに済んだが、治まらぬのは外國人の胸の中で、行李を纏めて横濱や東京などへ引揚げて仕舞つた、而して其結果は甚だ六ヶ敷い問題となり、遂には國際關係にまで及ぼしたたのである。

其時外國人の主人役なる人が嘆息して云ふには「是迄御國の方から度々トラストの申込を受けたので、自分もどうかして之を成立させたいと思ひ、先づ其手始めに此事業に係はつた様な次第である、然るに斯んな事が持上る様では、此後の安心が出来ない、眞に惜しい事ではあるが、もうトラストも駄目であらう云々」と。

所が其後事情をよく調べて見ると、之は全く或る少數の無頼漢の所爲であつて、他の邦人の多くの者は、却つて好意を持つて居つた

ことが明かになつたので、彼等も安心したとのことである。其後續いて盛大に事業も遣りつゝあることと思ふ。

以上述べたゞけでは、何だつまらないと考へらるゝであらう、所が此事の起因を質して見ると、頗る注意すべきことがあるのである。此原因は八十名ばかりの職工を一時に解雇したためであるが、其八十名が一時に辭職したと云ふのは、平素不快に思つて居つた一事務員の一言の過失に激昂したのであると、其當時の新聞紙は報じて居る。果して之を眞なりとすれば、僅かに一事務員の失言により、斯迄大事を惹起し、御互國民の精神まで誤解せられ、危く國際問題にも及ぼしたと云ふことは、眞に注意すべきことではあるまいか。

今後は外人とのトラストも益々多くなることであらうが、習慣風



俗を異にする外人對手の此經濟機關を、甘くヤツつけると云ふことは、少くも外務大臣と大藏大臣との手腕を要するので、眞に難事である、そこで之に當る邦人は、格別に注意をせねばなるまい、殊に我商業の上から云つても、今後の御得意先は此外國人であることを思へば、如何に諸君の責任が重きか解らないと思ふ。

彼の南清地方に於けるボイコットの如き、未だ静まつたとは云へない。否今日でこそ香港附近の一事變に過ぎない様なものゝ、まかり間違へば今後とても我邦人に對する示威運動として、何時何處に斯んなことが起らぬとも限らない、此場合に處する商人諸君の決心には、偉いものが有ることゝは信ずるが、ヨシ如何ほど主人役が骨折つても、若し働く人の中に主人の心を察せず、其心不謹慎なるものあらば、前に述べた外人の感情を損した様な事が起り、何彼と悶

著は絶えまいと思ふ。

然れば事務員の品格は、常にトラスト等の成敗に關係を有するのみでなく、我邦人凡ての事業上に大關係を有するものであると申すも過言ではあるまい。

## 第十章 富豪の子弟

既に是迄申上たる所によつて、宗教の本領は人の精神を支配し、之をして安全なる基礎の上に置かしむるものであることは御解りになつたらうと思ふ。

さて、人の精神と申すものは餘程大切なものであつて、善く向けば總ての幸福の源となるものゝ、萬一間違ふと、それこそ大變、丁度大黒柱に虫が這入つた様なもので、全家を壊はして終ふのである。



又此精神が光を失へば、天下は眞暗である。聖書に  
身の光は目なり、若しなんぢの目瞭ならば全身も亦明なるべ  
し、若しなんぢの目眊からば全身暗かるべし、是故に爾の中  
の光もし暗からば、其の暗きこと如何に大ならずや

(馬太傳第六章廿二、三節)

と記してあるが、眞に此通りであつて、精神が暗くなれば、何處も  
暗闇で、躓くか、溝に陥るか、失策は絶えず、そして果は滅亡に  
行くの他はあるまい。

所で、精神を教育すると云ふことは、なか／＼困難な事で、兎角  
疎かになり易い、其結果第二の大黒柱と稱すべき子弟に虫がつくの  
である、然も吾々は御互に、皆此難事を負うて居るもので、夫がた  
めには日夜人知れぬ苦心をして居るのである、けれども兎角、その

苦心が水泡に歸して困るのであるが、世の富豪と呼ばるゝ人に於て  
は、其苦心一層甚しきものがあることをお察し申すのである。

嘗て或る富豪の細君が余に向つて「金持の子供程不幸なものにあ  
りませぬ」と嘆息せられたことがあるが、これは此夫人ばかりの感  
想ではあるまい、よく此點に就て考へて見るならば、世間此例は乏  
しくあるまいと考へらるゝ。

此夫人は既に其不幸を悟つて、心に之を悲みつゝあることなれば  
無論相應の豫防もし、警戒もして居られるのであらう、然るに尙此  
嘆聲が洩れると云ふのは、此問題の輕々に付すべからざるを證して  
居るのであるまいか。

勿論余が斯く申せばとて、諸君が其子弟の教育を全く顧みないと  
云ふのではない、諸君は其子弟のため、乳母を雇ひ、兒守を置き、



家庭教師を招いで、學校教育は申すまでもなく、尙金錢で出來得る限りの方法は盡されて居る事と信ずる、然し斯くまでしても、其子弟の多くが眞面目でなく、智恵づき歳を重ねると共に、横道に走り出すと云ふのは、そもく何故であらう。

其理由は種々あるであらう、然し余の見るところによれば、夫は余り金力に依頼し過ぎて、そこに油斷が出來、従つて精神的教育が缺けたからである。

人の多くの苦心は金錢問題であるが、又其金錢に不自由が無い様になれば、安心が起ると共に油斷の生ずるは自然の結果であらう、之は富と云ふ幸福の中に含まれた不幸であつて、如何とも致方はな

50

そこで、金銀を握つて社會に立つ人は、他の者より一層精神的修

養を務めなければならぬのである、實に金銀は人を生かしもするが、又人を殺すのも金銀である。然れば富豪の子弟と生れたる人は、充分此點に注意を拂ひ、生來の幸福を禍の種子とせぬ様、修養するところが肝要である。

聖書の中に一つの物語が誌してある。それは一人の富豪の息子が胸一杯の愛と疑と苦とを持つてキリストの前に出て行き、丁寧に挨拶をした後「先生、永生はどうしたならば得られませうか」と尋ねた。此永生と云ふことは、一寸説明をせねば解るまいと思ふが、此處には唯簡單に、精神が元氣に充ちて居り、惡に克ち義に勇むの力とでも云つて置かう。

却説、此青年は一通の教育も備はつて居り、相應の家柄の生でもあり、其上ドツサリ財産があつたので、世間の眼には、只幸運なる



息子とより見えなんだ、所が實際はさうではなく、愛ひ、苦み、煩悶に煩悶を重ねて日々を送つて居つたのである。そこで此質問を聞き給ふたキリストは非常に同情を持たれたものと見え、「之を憫みて答へ給ふた」と誌してある、そして其答は斯うである「お前が永生を得たいと思ふなら、聖書にチャンと誌してある様に誠を守るがよい、そしてなれば永生が得らるゝであらう」と仰せられた、スルト此青年の云ふには「先生、誠は私が幼少の頃から、守つて居るもので、更に缺けた事はあるまいと思つて居ります」と答へた、是に於てキリストは「さうか、誠を守つても、お前の心には生々した元氣が云ないか、それならばもう一つのことを教へやう、それはお前の財産を悉く他人に施してしまひなさい、そして我が弟子となるならば、屹度永生が得らるゝに相違ない」と御答へになつた、之

には驚いたと見えて、這々の體で逃げ歸つたと誌してある。

己の財産まるつきり施して仕舞つて、そしてキリストに従へとは、成程殿しい御言葉であるが、此物語の意味は今日尙多くの學者の間に説があつて、之は青年の荒膽を取るだけのことで、實際施して仕舞へとの意味ではあるまいと釋く人もあり、否々眞に此御言葉通り遣るのであると主張する人もあり、其他種々に解釋せられつゝあるが、如何様に説くにしても、此人がまだ歳の若いのに、財産を持つて居つたことを考へて見ると、其財産は疑ひもなく、親譲りのものであつたことが知られる、そこでキリストの御精神は「親の身代に啣りついて居る様な青年では、どうして元氣が出やうぞ、一人前のものとなるには、赤裸となつて、即ち生れたまゝになつて、我が教に従へ」と云ふのであると説く人があるが、余は此説に賛するもの



である。

斯の如く説明して見れば、これは今日も大問題であつて且又眞に面白き教であると思ふのである。然るに世には金さへ作れば、子孫安全なりと考へて、其他を顧みるに暇の無い様な人も少くはない様であるが、それは大なる誤解であつて、取返しつかぬ恨を遺すものではあるまいか、どうか富豪たる方々と、其子弟たる方々に充分の反省を願ふのである。

## 第十一章 混雑せる家庭

日本の家庭は未だなか／＼混雑して居つて、之が單純に又美しくなることは、餘程力を盡さねばならぬことと思ふ。殊に商人の家庭に於ては一層困難なことである。

從來我が國の舊家とか、豪商とか云はるゝ家では、却つて多人數の家族であることを誇としたもので、少數の家族は、即ち其家の繁盛ならざるを意味して居つたのである。勿論事業を盛大に遣らうと思へば、勢、多人數の雇人を要するのであるが、余が爰に混雑と云ふのは、其意味ではない、全く家族の關係を云ふのであつて、たとへば主人夫婦と其子女の他に、其父母もあり、其又父母である祖父母の一人位が同居すると云ふ位は、珍しくも無いが、其上主人の兄弟の一人二人や、其父母の兄弟なる叔父叔母で故あつて其家に厄介となつて居るもの、尙其上に親類の懸り者などがあつて、之が一緒に住むとなると、随分混雑なものである。それに男女の雇人が十人十五人もあるとすれば、殆んど三十人からの家族である。

此多數の大家族を指揮號令するものは誰であらうか、勿論表面上



には主人夫婦が此大任に當る筈だが、實際はさうでない。達者な父母は年若いものゝする事は、見て居つて安心が出来ない、従つて親と云ふ實權が振まはされる。これのみならずまだよいが、其他の多くの口からは、時々横槍が飛び出す、批評が出る、攻撃の聲も起る、非常な騒ぎだ。

此間に立つ主婦たる人、即ち他から這入つて来た妻たる者の、心配は容易なものではない、又斯う云ふ風では、縦令表面は平和の様に見えても、裏面には風波の絶間が無いのである。又斯うなれば、家の内が面白くない、家庭の空氣は濕つて来る、眞に不愉快極まるものである。そこで人の心は自から外の方に向つて来る、外には太陽が照つて居る、面白いことは外にのみ有る様に思ひ出す、何時ともなしに腰が落着かなくなつて外の娛樂を追ひ求める様になるの

である。

是に至つては、主婦たる人の心は一層苦を増すのみで、眞に氣の毒なものである。初めの内こそ、里方へでも行つて語れば氣晴しにもなつたが、さう何時までも斯んな事で慰みになるものでもないから、遂には己も一層遊山なり、芝居見なりに行く方がよからうと、美服飾つて出て見るものゝ、矢張其時ばかりで、歸つて見れば元の愛ひの家であつて、どうとも仕方がない。

之が従來の商人の家庭であるとするれば、實に氣の毒なものである。そこで或る論者は之が改良を計つて、歐米流に單純な別居論をかつぎ出す人もあるが、それも早速の間には合はぬ、ヨシンバ己の娘を嫁にやらうと思ふ親心には、賛成は出来ても、其反對の側に於て、外より娘を貰うて、息子の嫁にしたいと思ふ親の心では、それは日



本在來の美風を毀つ大禁物であつて、容易く賛成する譯には行くまい。

然れば目下の處では、主婦たる人を始めとして、家内一同諸共に先づ其心を養ふのが何よりも肝心であらう。あれがうるさい、あれさへ無ければと、思うて居るが、さて己の氣に入らぬ者を除き去つたら、何が残るであらう、古の僧侶は此世の中が氣に入らんで、家屋敷は勿論、妻子まで棄て、しまつて、山に隠れたのであるが、それで安心が出来たかと云へば、決してさうではない、里には里の心配がある様に、山には山相應の苦勞がある。矢張此處も亦愛世なりとの歎聲が出るのである。

故に、心配や苦勞の根原は、事柄や他人の所作によるのではなく、全く己の心の持ちやう一つにあることを覺らねばならぬ、其心の持

ちやうでは、苦しいことも喜びとなり、悲しいことも笑ひとなるのである。その餘りに他人のことにのみくよく／＼せずして、己の心の修業の足りないことを考へ、自ら大いに修養することが必要である。キリストは

柔和なる者は福なり、其の人は地を嗣ぐことを得べければ也

(馬太傳第五章五節)

と云ふて居られるが、此の柔和と云ふ言葉の意味は、踏みつけらるゝ、と云ふことである、されば踏みつけらるゝものは福なり、其人は地を嗣ぐことが出来る、と讀んでもよからう、又其の地を嗣ぐとは、相續人となる、云ふ意味にも取られるが、寧ろ成功すると云ふ意味に取る方が善からう。

そこで此御言葉の意味は「踏みつけられても、柔和に之を堪へ忍



ぶものは、成功者となることが出来ると云ふことになる。古句にも踏まれても咲いたんぼしの笑顔かなとするが、よく似よつた言葉である。

それ故に、毎日家族間に、或は朋輩間に氣に入らぬことがあつても之は踏みつけた仕打である、人を馬鹿にして居る、實に失敬千萬此まゝには捨て、置かぬ、と怒らずに、此教の如く此處を耐へ忍ぶのが、己の修業だ、成功の基だと考へ直して見るならば、何の風波も立つことはなからう、否遂には其家の譽め者となつて、彼人は感心だと人の目にも留る様になつて來るのである。然れば心さへ正しく持てば、悲しみも喜びとなり、禍も幸福となるのである、つまり人間は、なるべく多くの人に、成る可く多く親切に交つたものが勝であることを知らねばならぬ。

之を思へば、三十人の主婦として困難を忍ぶ奥様の光榮は申すに及ばず、又之を助けて其家起す人々は、非常に豪い者ではないか、決して之を苦しいなど云ふべきものではあるまい。

殊に男子は外に在つて、多くの人々と交はることなれば、澤山の人の間には、善からざるものもあり、罷り間違へばどんな目に遇ふかも知解らない、又相場の變動は思ひがけない損失を來すかも知れぬ。朝出るときと夕飯するときの心持は、丸で佛と鬼との相違がある事もあるらう、又さなくとも心配と疲勞に充ちて歸つて來ることもあらう、此時に一家の中が鬱陶敷く、濕りがちで、不快の空氣に充ちて居つたならば、如何に苦しさことであらう。

併して斯る時に處して主人を慰め、勞るところのものは其妻を措いて他に求むることは出來まい、實に重大なる任務ではあるが、之



を遣り通す妻たる人の光榮は、如何ばかり大いなることであらう、然るに此反對で、妻たるものが夫の苦衷を察せず、却つて不快な感とを與へる様である、夫に取つての家庭は慰籍所どころか、寧ろ厭ふべき所、悪感を引き起さしむる場所である。

既に家庭に於て一日の勞を愈すことが出來ず、慰安を得ることが難いとすれば、其慰籍をどこに求むるであらう、遂に惡所遊びをし、放蕩に身を持ち壞すは、火を賭るよりも燎かなことである、之を思へば家庭の中心にして主婦たる人は、他よりも一層注意して、其心を養ひ、以て常に其準備をして居らねばならぬのである。

## 第十二章 家長の責任

凡て事業が困難であると云ふのは、雇人を使ふ困難が伴ふからで

あると云ふのも、一つの重なる原因ではあるまいか、今日堂々たる實業家でも、打明けて語つて見ると、此點に就て非常に苦心して居るもの少くはない、殊に從來の奉公人組織の商家では、一層の困難を感じつゝあるのであるが、尙將來に於ても、此困難は増すとも減すことはあるまいと思ふ。

現に、今ですら其困難に氣を腐らせて、一層店を閉ぢ、一切雇人を置かざる方がマシだと、格子戸閉ぢて、無職業となつて居る家も間々ある様に見受ける、併し人を使ふ困難は、唯實業家にのみ限つた譯ではなく、何の社會でも一様に感じつゝあることであり、又誰も苦心慘憺、頭を悩ませぬものはあるまいと思ふ。

所で此雇人と云ふことに就て、余はイエス、キリストが爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役はるゝ者となるべし、



また爾曹のうち首たらんと欲ふものは爾曹の僕となるべし、  
此の如く我が来るも人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれ又  
おほくの人に代りて生命を予へその贖とならん爲なり

(馬太傳第二十章二十六節—廿八節)

と仰せられた御言葉を思ひ出すのである。

全世界が救主と崇め、無上の尊敬を以て信仰しつゝあるイエス、  
キリストでさへも、此世にお出になつた時は、己を忘れ、僕の有様  
に爲られて、無智蒙昧の弟子達の足を洗ひ給ふたのである、而して  
更に彼等に教へて、斯の如くせよと仰つたのが即ち此の御言葉であ  
る。

余は二千年後の今日、家長として、又は社長として多数の人を使  
用せらるゝ方々に、此御言葉を参考に供したいと思ふのである。而

して此事が成程と合點が行けば、下女下男に對してはどうすればよ  
いか、事務員、店員に接するとはどうすべきものか、と云ふ問題の  
解決は、難なく興へらるゝことと思ふ。

殊更に申すまでもなく、彼等とても人の子であつて、各自皆それ  
相應の天職を授かつて居るものなれば、人の上に立つ所の人々は、  
此點をよく辯へて、彼等の前途の幸福を計つてやる、語を變へて云  
ふと、己の僕となすに先つて、彼等の僕となつた心持で、その利益  
幸福を計つてやるのである。

此親切、此同情が彼等雇人の胸に解つた時、彼等は云はず語らざ  
る裡に、此人の爲には一生懸命、力のあらん限り盡さねばならぬと  
云ふ感恩の精神に燃えて來るのである。

全體我が國民は、恩義に感ずることの切なる國民である、と云ふ



ことは、既に我等の知る所であるが、此恩義に感ずる所から、大は忠君となり、愛國となつて目醒しき活動を爲し、小は一人の間に働きて、或は忠僕となり、或は忠婢となつて世に顯はるゝのである。之が我が國民の頭を支配し、腦中を流れて居る念慮であるが故に、我等は望み且つ楽しんで、彼等を育て、やる必要があるのである。此方から真情を以て向ふならば、必ず、彼等も亦真情を以て對ふるに至るのである。

そこで、彼等を冷淡なる他人扱にせず、反つて己の子の如く、娘の如く考へて取扱ふことが大切である、聖書の中に

僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん

(箴言第廿九章二十一節)

とあるが、實に此點を云つたものであらう。斯の如く主従が親子の

如くになれば、其家、其會社の隆盛は期して待つべきで、如何なる難事業も、容易に成功するのである、眞に幸福な事である。

又彼等の爲に盡す所の方法に於ても、只當面の事業上ばかりでなく、精神的の方面、即ち宗教的修養をも、爲らるゝ様注意を願ひ度い。且つそれに就ては、只口先即ち言語の奨励のみでなく、自ら進んで手本を示して戴き度い。古語にも云へる如く「上の爲す所、下之に倣ふ」で、主人たる者が其道を歩んで見せることは、彼等に取つて如何に注意を引くことであらう。

此故に、出來得る限り諸君が卒先して、此方針でやつて行く、若しも出來得ることならば、其研究會と云ふ様なものを、自宅又は會社内を開き、相應の教師を招きて、社員并に家族等が打集うて、靈的修養をする、尙進んでは教會の様な所へも往て見る、又一方では



信仰あり、靈的修養の出來た人物にして適當なる顧問、又は事務員を用ゐて見るなども大切なことと思ふ。

斯の如くして修養を重ねて行けば、遠からずして其効果が顯はれて來るに違ひない、而して之が其會社又は自店の幸福となるは勿論尙廣く社會にも有益なる人物を供給することが出来るのである。のみならず、尙此上に年一年と、諸君の養ひ上げた人物が活躍して行くことは、是とりも直さず諸君の金鵝勳章であつて、何を以てするも、たとへ様なない喜を感じるに至るのである、況んや、諸君の大切な子弟が、其善感化を受けて發達するに於てをや。

古人曰く「積善の家には餘慶あり」と、是余が諸君に向つて、大奮發を以て此方針に進まれんことを希望する次第である。

### 第十三章 神の存在

以上論じた所により、宗教的修養の必要なることは、ほゞお解りになつたことと思ふ。そこで、本章に於ては、其修養に於て肝要なる、神の存在と云ふことに就て述べて見やう。

元來、キリスト教では、天地の間には、智慧と能力と恩恵に富める獨一の神様が在し給ふのである、と信するのであるが、其神様は形なき靈の神様で、我々の肉眼をもつては見ることは出來ない、丁度我々の心と申すものが、形なきもの故見ることが出來ない様に、神様は天地の心であつて、何處にも行き亘つて働き給ふにも拘はらず、靈なるが故に目には見えない、靈の神様は靈を以て識るの他に道はないのである。



然らば其靈を以て識ると云ふことはどう云ふことかと云ふに、心を以て悟る、即ち道理と信仰によつて合點することである。併し之は一寸六ヶ敷いことで、矢張肉眼で見たい、手で觸つて見たいと思ふのが人情で、此人情の弱點につけ込んで、作り上げたのが所謂偶像教である。人の死したるを神と祀ることより、日月、山川、禽獸昆蟲の類に至るまで、これも神、あれも神と崇めらるゝ様になつたのも、これがためである。之に就て本居宣長大人は

神と云はゞ皆等しくや思ふらむ

蟲なるもあり鳥なるもあり

と詠まれて居るが、なか／＼面白い歌ではないか。

又斯の如く萬物を拜むところの教の數はどの位あるかと云ふと、或は八百萬と云ひ、或は千五百萬と云ふ位だから餘程澤山のものに

は違ひないが、神道の大家平田篤胤先生は、細密に數へるならば、粟五石の粒數ほど神の數があると云はれて居る。

如何にも澤山な神様である、迷と申すものは恐ろしいもので、眞の神様を見出し得ない内は、何處まで迷ひ行く事か計られないのである。

昔、ギリシヤの國では、知らざる神様を祀る宮があつたさうだが、それはギリシヤでは、多くの神様を祀つて見たが、まだ人間の氣のつかぬ、知らざる神様があるかも知れぬと云ふので、知らざる神様と名けて祀つたと云ふことである。

併し如何に教の數が増しても、夫が眞正のものでないならば、却つて迷が深くなるのみで、決して安心は出來ない、又眞正のものを見出す迄は、とても満足は出來ないのである。



丁度阿波の十郎兵衛の娘お鶴や、又は彼の石童丸が、父や母を尋ねて、或は西國順禮となり、或は高野の山に、其慕はしき生みの親を見出すまでは、止まなんだ様に、世の人々も、眞の神を尋ねて止むことは出来ないのである、タツタ一人の母親が借に居れば、赤兒は最早満足して眠るではないか、眞の神様さへ信仰すれば、人の心も最早安心と満足を以て他に迷ふ愛はないのである、語を變へて云へば、天地の間に、能力と智慧と仁愛に富める、活きて働き給ふ獨一の神様があると云ふことが解るならば、我々の心に安心と満足が起るのは自然の理と云はねばなるまい。

此がために、昔から多くの賢者、智者が起つて、此眞の神を知りたい、又知らせたいと苦心して居る、其教ふる言葉こそ違ひもすれ、其實は何れも此神を指して教ふるのではあるまいか。或は孔子の天

と教へ、道と説くのも、或は釋迦の佛と教へ、眞如又は大我などと云ふのも、皆同様で、此神のことを示して居るのではあるまいか、其他西洋の學者などが、絶對と申したり、無限の意など申して居るのも、つまり此神を指して云つたものに外ならぬのである、只彼等は臆るに示し、キリストは明白に教へるの差があるのみである。

是に於て、考へねばならぬことは、同じ、斯るものゝありと教ふる以上は、どれを我が師として信ずるかである。云ふまでもなく、明白に教ふるものこそ、我等の善き教師と云はねばならぬ。

キリスト教が世界中に傳へられた、何處の人々にも満足と興へ、如何なる文明の人々でも又未開の人々でも之を信じて、安心を得て居るのは、此眞の神を明白に示したからである。

さて、キリスト教では、此神の存在を明白に教ふるのみならず、



此神様は此上もなき義しき御方だと教ふるのである、而して之を信仰するものは、其心中に神の義を實驗するのである、従つて世の宗教にありがちな、神を侮ると云ふことが無い、又此神の義を信ずるのものは義しくなり、清き人間となる事が出来るのである。

併し義しきのみならば、過失の多い、弱い我々は、其神を畏れ、遠かると云ふことになり易い、そこでキリスト教では、神様は義しき御方であると教ふると同時に、御様は恵深く、愛に富める御方であることを教ふる、此神様を天の父として親しみ。其恵に入れらるゝ事が出来るのである。

又世には、キリスト教の神を知らずして、外國の神を信ずるかの様に云ふものもあるが、之はもつての外の間違ひと云はねばならぬ、寧ろ余は此神を知らずして、他の神を拜する人の中にこそ、外國に

神に迷ふものがありはせぬかと思ふのである。手近い例を擧げるなら、商人諸君の一番よく信仰する、あの七福神は六人まで外國人で唯一人即ち蛭子様ばかりか日本人である。斯んな例は幾らもあるが、爰に一々申述ぶる必要はあるまい。

キリスト教の教ふる神様は天地に満てる神様であるが故に、此神様を信すれば、日本に居つても、外國に行つても、何處、如何なる處にも神様から離るゝと云ふことがない、是キリスト教の神様は天地に満てる神様であるからである。若しも諸君が商業のため海外に乘出す様なことがあつても、別に守札に作つたり、御厨子に入れたりする世話は入らぬのである、縦ひニエトヨクであらうが、ロンドンであらうが、但しは海の上、山の中、何處にあつても共に在す神様である。



そこで、恐ろしと感ずる時は勇氣を求め、苦しき時は祐助を受け、恐しき時は慰籍を請ひ、弱りたる時には能力を與へられ、愚かなる時には知恵を授け給ひ、晝となく夜となく、四六時中此神様に導かれて、世に立つことが出来るのである。

然も、之は只少數のもの、信仰ではなく、キリスト教を信ずる者は、老若男女、賢愚學不學の區別なく、一樣に此恵に與ることが出来る事を實驗するのである。

斯く述べて來ると、或は問はるゝであらう、眞の神様のことは一應合點が行つたが、さて我々が今日まで、神佛として拜し來つた者に對しては如何にすべきやと。成程尤も千萬な質問である、余は喜んでお答へ申さう、夫は何も六ヶ敷いことではない、我等が拜し來つた宮寺は、是聖人や大人物を崇める爲めに建てたる記念殿と心得

相應の敬意を表し、又先祖や已に關係ある者の墓碑は、之も亦記念の爲めと思ひ、町重に保存し、雑草を生やしたり、塵芥に埋むることの無き様爲なければならぬ、其他祭禮や亡き人々の法事の如き、何れも記念日として、相應の方法を以て、之を行ふ様に致したいものである。苟くも酒食や慰みの道具としてはなるまい。斯く心得て行くならば、眞に心地善い譯ではないか。

## 第十四章 人生の事

此世は塵の世であつて、人生は無常であると教へた佛の道も、確かに一面の眞理を示されたものである、併し我がキリスト教では、今一段と奥深く、且つ實際的に説くのである、即ち此天地は神様の造り給うたものであつて、時を経るに従ひ、善より善に進化しつゝ



あるものなれば、その日毎くに移り變る有様は、無常と云へば、云ひ得ぬことも無けれども、其最後の目的は、此世が次第々々に文明となり、開化して、遂には此世ながらに天國となることである。ヨシヤ其道中には、雨が降り、風が吹くとも、達する都は神の國、それを望んで力を竭すのが、我々人間の義務であると教へるのである。

此事に關しては、論より證據、今より百年前と今日とを比べて見れば、疑は即座に晴れて、春の雪の様に消ゆるに相違ない。

兎角人は近眼で、只目先の事ばかりを見て判断するが、之がそもく迷の始め、爰に失望も起れば、落膽もする様になる、揚句の果は我身で我身を逐ひ込んで、浮上ることの出来ぬ様に爲てしまふのである、是が爲めには、前途有爲の人物が身を誤り、人生を空に過

して居るのである。甚しきに至つては、厭世觀を起し、何物よりも大切なる其生命さへも、可惜石瓦の如く、打捨て仕舞ふものも少くはない。

或人は「日本人の三分の二までは、此厭世觀に捕はれて居る」と云つて嘆息せられたが、果して之が事實とすれば、我が日本人の多くは、落膽と狼狽と自暴自棄とに、陥つて居るのであつて、實に悲しむべき現象と云はねばならぬ。

ところが、キリスト教の教理によると、其邊の考はまるで異つて居る。

神は此天地の造主、此世は神の國であつて、人間は其神の子である、而して神より此世に遣はされた全權公使である、故に此世に在る限りは、神の御旨を畏み、此世の中に己が生れて來た時よりも、



其死ぬる時の方が、一ツでも善い事の増す様に力を盡すのが其職分である、此が人生に對するキリスト教の解釋である。

そこで、此教によつて、此世に生存する我々の道筋が明かになるのである、更に唯明かになるのみならず、此に依つて大なる能力を得るのである。それは又何故かと申すと、此世は神様の御支配の下にあつて、漸次天國の有様に進んで行くものであると云ふ事や、我々は神様より遣はれしものと思へば、我生涯は如何にも生き甲斐あり頼み甲斐あるものとなつて來るからである。殊に己は是神の子であつて、神の權能を授けられ、此世界の支配者即ち萬物の靈長として、此世に置かれたるものであると思ふことは、如何に愉快なることであらう。

此自信は應て自重心となり、奮發心となり、徳義心ともなつて、

佳言善行の源となるのである。

此自信ある時に、どうして、失望し落膽し、自暴自棄し、厭世觀に陥るが如きあさましい心になれやう。人が失望したり、悲觀したり、遂には五尺の體軀さへ、置所のない様な氣になるのは、畢竟、己を知らず、己の本分を辨へず、此人生の意義を覺らぬからである。然れば吾人は此人生の意義をよく覺り、之に處するに誤らざる様此點の教を服膺することが大切である、人間の生涯には種々の場合のあるもので、決して何時も喜ばしい事ばかりも無ければ、何時も楽しい時ばかりでもない、寧ろ其反對に、常に苦しいことや、悲しいことが多くあるのである。

併し、この一見不幸不仕合と見えることも、其人の精神の持方一ツで、仕合と變ずることも出來れば、幸福と爲すことも出來るので



ある。

要は、其人がどう云ふ事に出會しても、失望せぬことである。パウロと云ふ聖人は

われら四方より患難を受くれども窮せず、詮かた盡くれども望を失はず、迫害らるれども棄てられず、跌倒さるれども亡

びず

(哥林多後書第四章八、九節)

又

第これ耳ならず患難にも欣喜をなせり、蓋は患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る

(羅馬書第五章三節—五節)

と云つて居るが、此精神、此元氣が實に貴きものである。此元氣のある時は、如何なる不幸も吹飛ばされ、此精神ある時に、何程不景

氣、困難が襲ひ來るも、七轉八倒の後、終に凱歌を奏することが出来るのである。

故に、此人生觀を確信する人は、決して泣言を云はない、否進軍の譜を奏しつゝ進む兵士の如く、常に勇ましく、望を懐いて世に處することが出来るのである。

尙一ツの大切なることは、我等が神の子なれば、御互に兄弟である、内國人は勿論、外國人であつても、皆等しく神の子、即ち兄弟である。世界の人が皆兄弟であると云ふことは、親誼が一層堅くなる譯である、互に相食み、互に相欺くと云ふことの有り易き商業上にも、親切と云ふことが増して來る譯である。又従つて信用と申すものも篤くなつて來る次第である。

斯の如く考へて來る時には、宗教と云ふ事は、決して商人に縁遠



さ閑問題ではあるまい、實に一日一刻たりとも、忽にすることの出  
來の大問題である。

## 第十五章 罪惡とは何ぞや

前章に於て、人間は神の子女であつて、此世界即ち神様の御國に  
御用があつて遣はされたものである、と申したが、爰に一ツの疑問  
が生ずるのである。

成程、人間が神様の子女であると言ふことは、能く／＼考へて見  
れば、合點が行かんこともないが、免角道理と實際は衝突を來し易  
いもので、大切なる道理も、目先の事實、一小事の爲めに打破らる  
様な事が、間々あるのである。

果して人間が、前に述べた様な尊い本性を具へて居るものならば、

何故に現在、色々のあさましい行爲をするのであらう、其日常の行  
狀に於て、其口にする言葉に於て、尙其奥に立入つて、人間の心が  
日常どんなことを考へて居るか。

深く考へて見るならば、我ながら驚き入るの他はあるまい、然る  
に是が神の子であると云ふ、寧ろ獸の子、猛獸の子女と云ふ方が、  
遙かに理窟に合ふ様な心持がするのである。

併し之は人間が罪と云ふ力に囚はれて居るからであつて、決して  
人間の本性が、斯の如くあさましい者ではないのである。

勿論罪と申したところで、色々區別があつて、形の上に現はれた  
罪、即ち詐欺とか、人殺しとか、強盜とか云ふ様な、世の中の法律  
に觸れることのみを指すのではなく、先に云つた通り、云ふまじき  
を云ひ、思ふまじきを思ひ、肝要なる人の品格の發展を妨ぐるが如



きは、皆此罪の働である。之を行つて、此大切なる月日を送りつゝある者は、是皆罪人である。

若しも此點に注意の足らないならば、如何に修養々々と八ヶ間敷く申した所で、駄目な話で、到底眞の道に踏み込むことは出来ないのである。

キリスト教では、人間の本性を最も高き所に置くと共に、之が高ければ高い程、此本性を傷けつゝある罪と云ふものを強く惡むのである。是に於て「人を射んとすれば、先づ馬を射よ」との論法で、人を救ふにはどうしても、先づ此罪と云ふ最大の馬を打滅ぼすことをしなければならぬ。

そこで、キリスト教では、凡そ罪と云ふことに就ては、世人の考へて居る様に大目に見て、打捨てゝは置かないで、微より微に、細

より細に亘つて、此大敵を征伐せんとして居るのである。

此點に就て使徒パウロは、誠に細かく探り入つて居る、彼はわれ願ふ所の善は之れを行はず、反て願はざる所の惡は之れを行へり、若しわれ願はざる所を行ふときは、之れを行ふ者は我に非ず、我に居るところは罪なり、是故に我善を行はんと欲ふときは惡の我にをる此の一の法あるを覺ゆ、蓋はわれ内なる人に就いては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法ありて我が心の法と戦ひ、我を據にして我が肢體の中にをる罪の法に従はするを悟れり、噫われ困苦人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや

(羅馬書第七章十九節—廿四節)

と嘆息して居るが、同時に斯く己を責むると共に、此罪の力は只己



一人に止つて勢力を逞しうするものではなく見渡す世間に罪惡の充ちて居ると云ふことを認めて

録して義人なし、一人も有るなし、とあるが如し、皆曲りて全く邪となれり、善を作すものなし、一人も有るなし

(羅馬書第三章十、十二節)

と斷言して居る。

如何に上部は立派に装うて居つても、ヨシ世の人は何らの惡評をなさずとも、何よりも、己の良心は己を如何に評するだらうか、實にパウロの所言した通りであると思ふ。

なきなど人には云ひてありなめし

心の問はゞいかゞこたへむ

と云へる古歌は自らを省みて、罪を判斷するに適當の歌ではあるま

いか。

此罪が根を張りて、人知れぬ憂愁とも、煩悶とも、苦痛ともなるのである。

全體此世の中は、罪と云ふことの爲めに九つさり本來の目的を失うて居る、春の花も、秋の月も、酒や色の奴隸にせらるゝ爲めに出來て居るのではなからう、是等は皆、心なき天然でさへ、斯様に美しく神の御用を盡して居るではないか、況してや萬物の靈長たる人間に於ては、全心全靈を込めて神様の御榮光を顯はすべきではないか、と聲なきの聲をあげて、我等に忠告して居るのではあるまいか。更に人間の上に就て考へて見ても、此罪と云ふものが、如何に我等の美しい性情を傷けつゝあるか解らないと思ふ。たとへば、我等が子女を與へられた時、其喜や云ひ難い、然れど、若し其子女が成



長するに従つて、罪と云ふ敵に捕へられ、墮落するに至る時はどうであらう、是こそ實に堪へ難い苦痛を感ずるのである。其嘆息の甚しきに至つては、寧ろ其子が生れなかつた方が幸であつたらうとまで思ふではないか、否々、尙甚しきは、慈悲の心を鬼と化して其子に對するのである。其結果として、實に悲惨な事柄が起るのであるが、實に親子の間のみならず、親戚、朋友、兄弟、夫婦の間の愛情も亦罪のためにはメチャクに打毀され、其本來の性情を變化せしむるに至るのである。

論より證據、日々の新聞紙は斯る悲惨な、又不徳な記事を以て充たされて居るではないか、實に恐るべきは罪の力である。斯くて神の子たる人間は、互に人を見れば鬼と思はねばならぬ迄に墮落し、神の國なる世界は、罪惡の横行する惡魔の巢窟となり、

互に角の突合ひ、血の流しあひ、所謂修羅の巷となつて來た、四海兄弟も萬民同胞もあつたものでない、全く猜疑の黒雲に覆はれて居るのである。

此と云ふのも、罪の能力の恐ろしき働きが、此世界を前に述べた様な本來の目的から、引きはなして居るからである。

あゝ、暗黒の王は罪である、此世界の支配者は惡魔である、之を征伐せずして、どうして此世を救ひ、此人類を救ふことが出來やう、我がキリスト教は此罪の征服を以て、教理の眼目とするのである。是が占め、人間總てに、如何に罪惡の恐るべきものなるかを警告し、一刻も早く其罪を悔改むる様勸告するのである。



## 第十六章 救主の事

暗きより暗き道にぞ入りぬべし

はるかに照らせ山の端の月

と云ふ叫びは、今や世界の隅から隅まで響きわたつて居る。

神の子の本性を持てる我々人間は、何時までも罪を主人として、滅亡に進むことは出来ない、どうかして其本性なる神の子の位に歸りたいと望んで居る。

併し人間と云ふものは妙なもので、氣がつかぬ間は兎も角も、さア、是から一奮發して悪の力より離れなければならぬと意氣込んで見ると、そこに一層悪の力の強いことを感ずるのである。之をたへて見れば、平氣の平左で酒を呑んで居る時には、左程酒の能力と

云ふものは感ぜないが、さて今日から禁酒致さうとなると、イヤハヤどうして容易のことでない。

決心しては倒れ、倒れては又倒れ、遂には、あゝもう駄目だ、と自分で自分に愛想をつかし、失望の揚句、以前よりは一層の大酒呑となつて仕舞ふのである。

之は只一例に過ぎないが、總ての罪惡の力は何れも皆此と同じ道理でもつて、我等を虜として居るのである。そこで、我等は自力の弱きことを悟り、己の能力の頼みなきを知るのである。

斯うなつて來ては、失望落膽に陥り、自暴自棄只罪惡の弄ぶがまゝになるか、さもなくば、遙に天の一角を仰いで救を求むるか、此二ツより道は無いのである。

是に於て、前に述べた古歌の様に、山の端に照る月を仰いで、其



光明を慕ひ、若しも此光明を失ふならば、最早暗闇から暗闇に陥るの他は無いと自ら悟つて、茲に信仰の心を起し、その信仰の力によつて、總ての罪惡に打勝つことの出来る様になりたいとの切なる望を懐く様になるものも出来て来るのである。

然らば、此山の端の月とは何であらう、或人は道と答へ、或人は眞理と答へ、或人は佛と答へるかも知れぬ。余も亦之を聞いて成程然うかと思はんでもないが、併し、余が仰ぎ見たる天來の光明は、實にイエス、キリストであつた。

康強なる者は醫者の助を需めず、惟病ある者これ需む、わが来るは義人を召く爲に非ず、罪ある人を召きて悔改めさせんが爲なり

(路加傳第五章三十一、二節)

それ人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり

と仰つたイエス、キリストは、我等の救主である。

(同第十九章十節)

其生涯は僅に三十三年で終つた。其道を弘められた歲月とても、二ケ年か三ケ年に過ぎなかつたのである。併しながら、今や全世界至る所として、キリストの救の光明が照らさない所はないと云つてもよい程である。

眞に彼は萬民の救主となつて居る。彼には世の人の貴む位は無かつた、彼は實に大工を職として、其三十年を送つたのである。又彼には世に驚かすべき學問も無かつた、彼が舊約聖書を読むのを見た人々は、あの無學の者が、どうして聖書が讀めるかと怪んだ程である。

然れども、彼は明かに天の父なる神の御旨の存する所を説いて、



世の人々に救の道を述べたのである。縦ひ、如何なる強敵であつても、更に屈せず、如何なる困難にも、眞正面から當つて、あらゆる苦みを嘗めつくして厭はなかつた。又無常の風の吹きすさみ、人世の頼み甲斐なきを示す此世に在りて、更に失望せなかつた、否此無常と見ゆる世の中にも、神の王國は東雲の太陽の如く、いと靜かに然も屢々として、建設せられつゝあるを信じて、露ばかりも疑はなかつたのである。

彼の祈禱は、一日も早く此地上に神の王國が建てられて、神の御支配のみの行はるゝことであつた。

彼は又總ての人を神の子と信じた、如何なる悪人と見ゆる者の中にも、猶神の姿の全く亡び失せざることを確信した、又己に敵し、己を陥れ、己を十字架に磔けた當面の敵をさへも、悪人なり、我敵

なり、とは云はなかつた。

彼は其最後の悲惨極まる死刑の時に於てすら

父よ彼等を赦し給へ、彼等は其の爲すところを知らざるが故なり  
(路加傳第廿三章三十四節)

と祈つて、其敵たる人々を愛し、之を祝して更に呪はなかつた。

彼は又始終神を愛して親しく交はり、常に此神に祈り、此神に任せ、又其聖旨なりと思ふ所は細大洩らさず實行したのである、時として、黒雲に覆はれて、其神の御姿が見えなくなつたこともあらう、又時としては、餘りに人情の浮薄なるを思つて悲しんだこともあらう、或は神在し給ふにも拘はらず、どうして斯くも此世が罪惡に充ちて居るのか、と怪しんだのもあつたかも知れぬ。

併し、一片不斷の信仰は、すべての雲霧を打拂つて、恰も明月を



仰ぐが如く、確信と希望と能力とに充ちて、此世に處することを得しめたのである。

彼が十字架の上に死を遂ぐるの時の有様を

事竟りぬ、父よ我が靈を爾の手に託く、如此いひて氣絶ゆ

(約翰傳第九章四十六節)

と記してあるが、如何に美はしき最期ではないか。

彼が懷きし、一片不斷の信仰とは「活ける天の父、我を守る」との一事である。此信仰が凡てに勝ち得て餘りあるの戰を爲さしめたのである。

此キリストを信ずることは、如何に偉大なる信仰ではないか、此無量の光明に浴する者が、どうして暗黒に住むことが出来やう。

我等は、此大光明を仰いで、己が心の照らさるゝことを自覺し、

此キリストを信じて、すべての罪より、全く救はれて、神の子の位に歸つたことを、實驗するものである。

## 第十七章 キリストスの人格

余は前に商人の人格と題して述べた時、其人格を養ふに就て、最も大切な事は、己の最も尊敬する人物を見出して、之を標準とすることであるが、今日の日本に、我等が人格の標準とするに足るべき人物があるや否や、と申したことであるが、余は爰に、諸君が此イエス、キリストの人格を其標準とせられんことをお勧め申すのである。

夫について、爰にイエスキリストの人格如何を少しく述べて見やう。



第一キリストの智慧 人の智慧の優劣を知には、其人が不用意の時に出席ひしことを以て判断するのが、第一の方法であらう。或時無靈魂を以て、來世無しと、主張する人々が、キリストに問うて云ふには、先生、私共の先祖の教によると、兄が妻を娶つて、子が無くして死んだならば、其弟が兄の妻たりし女を己の妻として娶り、其子が生れたならば、之に兄の後を相續させるがよい、若しそれにも子無くして死んだならば、其弟が之を娶り、遂に幾人もの兄弟が兄の妻を娶つてもよい、と斯う申して居ります。さて、茲に七人の兄弟があつて此教の如くに妻を娶り、最後に其妻も亦死んで仕舞ひました。お尋ね申し度い、其妻は未來に於ては、誰の妻と申すことが出来しやうか、此世では七人の兄弟が皆彼を妻としたのであります。どう云ふもので御座りましやうか」と例の靈魂なし

未來なしとの持説をほのめかしつゝ問ひかけた。

ところが、キリストは何の苦もなく、一言の下に「未來に於て夫婦なし、夫婦とは此世に於て、子孫を得んが爲めに定められたるもので、天國に於ては、人は皆天の使の如く、娶り、嫁ぐことは無いと答へられたので、一言の返す言葉なく、スゴ〜と立去つたと云ふことである。

全體、此未來の夫婦と云ふことは、我國でもなかなか面倒なことを惹起し、男女の間をかき亂して居る、かのお半、長右衛門の如き事の起るのも、皆之がためである。

然るに、之を未來に夫婦なしと斷言せられたのは、實に千古の名言ではないか。

又或時數人の反對者が遣て來て「先生、誠の中何が最も大切であ



りますか」と問うた。

此質問は一寸聞くと、何でもない様に思はれるが、さて、いざとなるとなかく六ヶ敷い質問である。日本人なら、君に忠と答へるかも知れぬ、支那人なら、或は親に孝と云ふかも知れぬ、ところがユダヤ人なる彼等は、真に此答には困つて居つた。

キリストは此問に對しても、更に苦まるゝ所なく、即座に「汝、全心全力を盡して汝の神を愛せよ、之が第一の誠である、第二は己の如く他人を愛するのである、古の諸聖人の誠も、つまり此二ツに外ならぬのである」と答へられた。

如何にも立派な答である、余は斯る答を容易く爲られたキリストの智慧は、如何に豊富であつたか、量ることは出来ないと思ふのである。

### 第二キリストの仁愛

慈眼視衆生と申す言葉があるが、キリス

トの言行は、一として仁愛ならざるは無かつた。

嘗て、弟子の一人がキリストの許に來り「先生、私共は、幾度まで人の罪を赦すべきでありましたらうか、七度位でよろしう御座りますか」と尋ねた。

キリストは「否々七度とは云はぬ、七度を七十倍せよ」と答へられた。

なんと、寛大なるお答ではないか、人の罪は無限に赦さねばならぬ、人を見捨てることはならぬとの、御自分の深き々々仁心を、其弟子達に示されたものである。

其仁心は、少兒を見ては、之を祝し、婦人に遭うては、之をいたはり、病める者は之を癒し、悲めるものは之を慰め、罪ある者は之



を救ひ、遂には己の生命さへ、打捨て、惜まなほほどに、大なるものであつた。

其御言葉に

人その友の爲に己の命を捐つるは、此れより大なる愛はなし

(約翰傳第十五章十三節)

とあるが、キリストは此御言葉を、十字架の死を以て證據立てられたのである。そして、其愛の敵にまで及んだことは、前章に述べた通りである。

第三キリストの勇　キリストの御説教の中に

人なんぢの右の頬を批たば、亦ほかの頬をも轉らして之れに

向けよ

(馬太傳第五章三十九節)

とある、之を一讀すると、如何にも弱虫の様な感じがするであらう、

併し、實際は然らでない、忍耐と云ふ潜める勇氣があればこそだ。

又キリストは

身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、唯なんぢら魂と身とを地獄に滅ぼし得る者を懼れよ

(馬太傳第十章廿八節)

と仰つた。實に眞勇の源は此處に在りと云はねばならぬ、キリストは此處に立つて、正義を行ひ、仁愛を施されたのである。此信仰が彼の美しさ生涯の基礎であつた。

尙又

凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也、もし右の眼なんぢを罪に陥さば拔出だして之れを棄てよ、蓋は五體の一を失ふは全身を地獄に投入せらるゝよりは勝れり、も



し右の手なんぢを罪に陥さば之れを断りて棄てよ、蓋は五體の一を失ふは全身を地獄に投入せらるゝよりは勝れり

(馬太傳第五章廿八節—卅節)

と、いかに偉い言葉ではないか。

然も、此時キリストの御年齢は、漸く三十歳に過ぎなかつた。血氣盛りの彼にして、此勇氣あり、以て男女間の清潔を斯迄嚴格に見たと、只々驚くの外はない。

述べて此處に至れば、キリストの生涯と其人格の如何は、充分に識ることが出来やうと思ふ。我等は此キリストによつて神に行き、此キリストによつて人生を悟り、此キリストによつて罪より義に移ることが出来るのである、而して此キリストの人格を標準として、己が人格の修養をなす時、是に我等の救は全く就るのである。此あ

るが爲めに、我々はキリストを我等の救主と仰ぎ尊むのである。

## 第十八章 永久の生命

死と云ふ文字は「一タビ」の三字で組立てゝあるが、實に面白いことと思ふ。

此一度こそ、我等の生涯には、ノツピキならぬ一度であつて、此一度の臨む時は、三公の叔威も其光を失ひ、巨萬の富も其魔力を失ふのである。

智者も學者も、賢者も愚者も、皆一様に、其愛する妻子をも、其大切なる親兄弟をも、其親しき朋友をも總て此世の風波の翻弄するに委せ置きて、最後の悲しき訣れを告げねばならぬのである。

さすがの大閤にも涙を流さしめ、さすがのナポレオンをも哭かし



めたのは、此一度である。

此一度が、時計の針のカツチ廻ると共に、我等の壽命を引寄せつゝあるのである。總てのことは間違ふことがあつても、間違ふことの無いのは此一度である。

そこで、我等が死後の有様はどんなものであるかを考へて見なければならぬ。

先づ第一は、我等が此世に遺したる子や孫が、我等の足跡を踏みつゝ、我等に似たる生涯を送ることである。

彼等が我等の爲したる善き雛形には倣はんとせず、それと反對に我等が思出すさへも、心苦しくつてたまらない悪き行爲をば手本として、我等に似たる生涯を繰返しつゝある此世の有様が、若しも、我等の心に浮び出るものとすれば、どうであらう、此事を第一に想

像して見たい。

第二は、我等の遺した事業が、其善き精神を受継いで、光榮ある成功を奏しつゝあるか、若くは、然らずして、我等の善からざりし精神に因つて、不義不正の結果を收めて、失敗しつゝありはせぬか、どうか。

第三には、我等の知己、朋友、其他多くの人々が我等の遺したる行爲によりて、或は善き感化を受け、或は悪き感化を受け、以て其禍福を招きつゝあることなどを、よく考へて見るならば、我等は今日此世に於て、決して不心得のことは出来ない筈である。

然して最後には、我等の靈魂がどうなるかと云ふことである。

前の三つは此世に残つて働くものであるが、此靈魂と云ふものは己と共に何處までも、又何時までも離るゝことの無い、永遠限りな



きの友であると同時に、又敵である。之を打消さんとして見ても、打消さんとするものが、此靈魂であるが故に、到底打消すことは出ない。斯んなものがあるものかと反對して見た所で、其反對するものは、即ち此靈魂である。

此靈魂が善ならば、來世も亦善であるが、若しも此靈魂が悪ならば、何處にそんな惡の靈魂が安んずる幸福の場所があらう。此世に於てすら、悪いことは現はれずには居らんのである、況んや、すべてのもの赤裸なる靈魂の住むべき來世に於てをや、どうしても、相當の報を受けねばなるまい。

ところで、斯く來世とか未來とか云ふと、直に、俗に云ふ地獄極樂、青鬼赤鬼、血の池や針の山の事を思ひ浮べて、又例の愚人騙しの方、便かと云ふ人があるかも知れぬが、それは又、餘りに早合點過

きた話で、余が茲に云ふ來世とは、然んなものを指すのではないこと無論である。

其來世とは、人の靈魂は此短かき一生で無くなつて仕舞ふものではなく、永久に存するものであつて、人間は皆一樣に此永久の望を持つて居るのである。そこに、初めて眞の努力も起れば、勤勉もあるのである。

諸君が人を祝する時、萬歳と稱へ、御代を壽ぎては、千代に八千代にさゞれ石、と歌ふのも、此心があるからである。

然るに、若しも、未來など云ふものはあるべきものでない、人間は此世限りの者であると云ふ人があるとすれば、取りもなほさず、此永久の考を取除く譯で、實に頼み甲斐の無い、張合のない譯である。



キリスト教では、來世のことを、永遠の生命、又は永久の滅亡と教へて居るのであるが、其永遠の生命と申すものは、先に述べた通り、己の罪を悔改め、キリストを救主と信じ、真心から神に信頼して眞面目なる生涯を送る人が得べきものであつて、斯る人は此世ながら、永生に移つた人であり、又其靈魂は既に神の子の本性に立返つたものである。

既に此世に於てさへ、永生に入つた人であれば、死しての心配は要らぬ譯である。來世で滅ぶ心配は少しも無いのである。

此真心と、此信仰は、己の救と共に、其妻子、兄弟、親族、朋友までも感化し、其事業を清むることが出来るのであつて、斯る例は世間に乏しくない。多くの人が此信仰と真心を以て、善行を勵み、陰徳を積んで居るのである。

此善行、此陰徳、此愛心が、どうして滅びやう、すべてのものが滅ぶ時が來ても、愛は滅びない、善も亦滅ぶことは無い。少石を池中に投ずれば、其水面に出来る輪は段々大きくなり、其波動は全地球にまで及ぶのである。

斯の如く、我等が遺したる感化力は、何時までも此世に残つて、我等の思ひよらざる時と處にまで及ぶのである。我等は天國と云ふ來世に於て、己が無上の幸と喜を受くると共に、此世に遺したる此等の感化をも、樂むことが出来るのである。

更に、我靈魂は滅びないのみならず、段々に發達して、神の御姿に似ることも出来るのである、之が即ち余が云ふ永生である。然れば、我等は現在只今の生涯から永生に入つて、死後來世に續くことが出来るのであるが、それに就て、我等にとりて、最も大切



なることは、現在只今、己がすべての罪惡を悔改めて、神を信じ、新生命に入り、我が全心全力を盡して、善事を爲すと云ふことである。

キリストの教に、天國は十人の僕を持てる商人が、僕の力量に従つて、相當の金を與へ、之を元手として商賣せよと命じ置いて、旅立した様なものである。其主人が旅より歸りたる時其十人を呼びて、各々何程の儲があつたかと尋ねた、其時或者は一萬圓、或者は千圓或ものは十圓と、其儲よりしだけの勘定をした。其時主人は大満足で

「あゝ善かつ忠なる僕ぞ、爾寡なる事に忠なり、我なんぢに多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ」と賞め、其儲け高の多少を問はなんだ。然るに、其中の一人が、己

の怠のために、只の一錢も儲けなかつたのを咎めて

「悪くかつ情れる僕ぞ」

と厳しく責めて、地獄の刑罰に渡した様なものである」と記してある。之は我々に、現在の行爲と來世の禍福との關係を教へられたものである。

どうか、謹んで服膺致したいものである。

## 第十九章 聖書

喰ふものは満ちても消ゆる腹の中に

ながく残るは讀めるふみなり

と云ふ歌は、本居宣長大人の詠ぜられたものであるが、誠によく穿つて居る。



形も無ければ香もなく、又味も無いが、一度讀めば、何時までも残つて消ゆることはない、否消えぬばかりでなく、それが何時までも心の中に働いて、若しも善き書を読まば、其善き言葉が生涯消ゆることなく、我々を益するが、之に反して、若し悪き書物ならば、其悪き言葉が、知らずくの間、我々の行く先々を禍するのである。余は爰に聖書と云ふ書物のことに就て、些か述べて見たいと思ふ。

此聖書と云ふ書物は、キリスト教の唯一の經文で、其總數が六十六卷ある。其内三十九卷を舊約聖書と云ひ、残りの二十七卷を新約聖書と云つて居る、之を書いた記者は數十人あつて、國王もあれば農夫もあり、學者もあれば、無學なる漁師の様なものもある。而して、其年代も亦數百年の間に、追々と出來たものである。又其記さ

れたる事柄も、決して一樣ではない、或は歴史あり、或は詩歌あり、或は説教集もあれば、傳記や書簡文の様なものもあつて、色々様々のものが集められて出來て居るのである。

此複雑なる書物が、何れも皆宗教と云ふ事を中心として書かれてある、云ひ換ふれば、先づ神様のことを始めとして、人間の罪の事や、救の事などが主意となつて記されてあるのである。故に、宗教に志し、宗教の事を學びたいと思ふ者は、どうしても、此聖書を研究せねばならぬ。

究に其内の二三の言葉を擧げて見ると

神言たまふ、視よ日至らんとす、その時我饑饉を此國にあくらん、是はパンに乏しきに非ず、水に渴くに非ず、神の言を聽ことの饑饉なり、彼らは海より海とさまよひ歩き、北より



東と奔まはりて神の言を求めん、然ど之を得ざるべし

(舊約聖書亞摩士書第八章十一、二節)

と云ふ言葉がある。よく味はつて見ると、昔のこの様に思はれない、今日の社會の有様をよく云うて居るではないか。

年々多くの書物は出版せられて居る、新聞と云ふ毎日の出版物より、雑誌と云ふ毎週或は毎月山の如く、發行せらるゝものを始めとして、各種の單行物は毎日の如く出版せられて居る。實に讀物の夥多にして自由なる、今日の如きは、未だ曾てあるまい。

所が、それにも拘はらず、人心の饑を飽かしむる書のないのはどう云ふ譯であらう、眞に心の渴を癒すべき讀物の無いのは何故であらう。兎に角、人心は此多くの讀物の中に在つて饑ゑて居る、渴いて居る。

饑ゑ渴くことに於ても、亦今日ほど饑ゑ渴いて居る時代は未だ曾てあるまいと思ふ。而して、凡ての人は、どうかして此饑や渴を満足させたいものと、悶え苦んで、何物かを追求して居るのである。前に述べた多くの出版物は、此要求に應じやうとして、出版せられつゝあるのである。然るに、此等の出版物が遂に満足を與ふことが出來ないとするれば、今日は是神の言葉の饑饉であると云はねばならぬ。

併しながら、聖書は

神の聖言はわれを活ししがゆゑに今もなほわが艱難のときの  
安慰なり、神の聖言はわが旅の家にてわが歌となれり

(舊約聖書詩篇第一百九篇五十、五十四節)

文



聖言うちひらくれば光をはなちて愚かなるものをさとからしむ

(同百三十節)

と記して、聖書の言葉が、如何に人心に満足を興ふるかと示して居る。

又聖書が、如何に社會の幸福を増進せしかに就ては、嘗て、アメリカの或王が、英國の女皇ヴィクトリアに使臣を遣はして「貴國の富強の源は何であるか」と問はしめたことがあつた。其時女皇は美しき一冊の聖書を贈りて「凡ての善は此一冊の中に在り」と答へられたと云ふことであるが、以て英國に於て、聖書と云ふものが、如何ばかり公益を促進しつゝあるかを知る事が出来やう。

最早、余は多くを語る暇がない、只一言を添へたい、而して此筆を擱くことゝしやう。

彼の有名なる政治家にして、又機敏なる實業家であつたベンジヤミン、フランクリンは最も聖書を愛讀した人であるが、彼は成功の秘訣を知らんと欲せば、舊約聖書の箴言を常に熟讀せよと云つたさうであるが、其箴言と云ふ書の中には

汝の手善をなす力あらば、之を爲すべき者に爲さざること勿

れ

(第三章二十七節)

義者の途は旭光のごとし、いよく光輝をまして晝の正午にいたる、悪者の途は幽冥のごとし、彼らはその蹟くものゝな

(第四章十八、九節)

になるを知ざるなり  
勤はたらく者の手は人ををさむるに至り、惰者は人に服ふるにいたる

(第十二章二十四節)

善人はその産業を子孫に遺す、されど悪人の資財は義者のた



めに蓄へらる

(第十三章二十二節)

すべての勤勞には利益あり、されど口唇のことは貧乏をさ

たらするのみなり

(第十四章二十三節)

怒を遅くする者は勇士に愈り、おのれの心を治むる者は城を

攻取る者に愈る

(第十六章三十二節)

と云ふ様な言葉を以て充ちて居る、確かに實業家の金科玉條と申すべきものである。

併し、聖書の最も能力あり、又最も大切なるところは、新約聖書

中の福音書と申す部分である。之は前に申した我等の救主イエス、

キリストの教が記されてある所である。

若しも、諸君が聖書を手に取つて、馬太傳の第五章、第六章及び第七章の如きところを一讀せらるゝならば、恐らくは暗闇より出で

、太陽の光に浴するが如き思をするであらうと思ふ。

どうか、此聖書を研究せられて、小にしては、その心の食物となし、大にしては、尙廣く、此世に善行を勵むの導を得らるゝ様、切にお勧め致すのである。

## 商人の宗教終



325  
105

發兌

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

警醒社書店

(振替東京五五三番)

不許複製

明治四十三年二月十六日印刷  
明治四十三年二月十日發行

○定價廿五錢

著者 竹 內 甚 吉

發行者 福 永 文 之 助

印刷者 渡 邊 爲 藏

印刷所 民 友 社

東京市京橋區日吉町十番地  
東京市京橋區日吉町十番地







年中星野氏修養之書  
讀物

◎基督教思林(朝の卷)

四二〇頁  
金七十五錢  
小包八錢

日毎に聖書本文を題詞となし、泰西思想家百七十餘人の感想と信念とを以て之を例證證明し、卷尾に索引及び思想家の一覽表を附す、實に入念の書也。

◎基督教談叢(夕の卷)

四〇〇頁  
金七十五錢  
小包八錢

日毎に聖書本文を題詞として、宗教的美談佳話を以て之を説明例證したるもの其談話無慮五百項、家庭談拜用に好適なる書なり。

◎基督教通觀(聖日の卷)

五三〇頁  
金壹圓  
小包八錢

基督教全體に關し五十二章の講話あり、思想は實際を主とし、文章は平易を旨とす。教會に出席の便宜を得ざる人、旅行者、病客等には極めて有益の書也。

●基督教叢書

一冊各二十錢  
郵稅各四錢

星野光多先生編輯

八濱德三郎先生著

基督教の比喩

今泉眞幸先生著

聖書文學一斑

有馬純清先生著

基督教辨證論

露無文治先生著

基督教本原眞理

武本喜代藏先生著

現世と未來

柏木義圓先生著

靈魂不滅論

星野光多先生著

耶穌の三大觀

柏井園先生著

基督教小史

山田寅之助先生著

基督教の現世生活

小崎弘道先生著

基督教の復活

星野光多先生著

宗教の中心祈禱

山鹿旗之進先生著

福音書の著者

高橋卯三郎先生著

聖書の價值

宮川巳作先生著

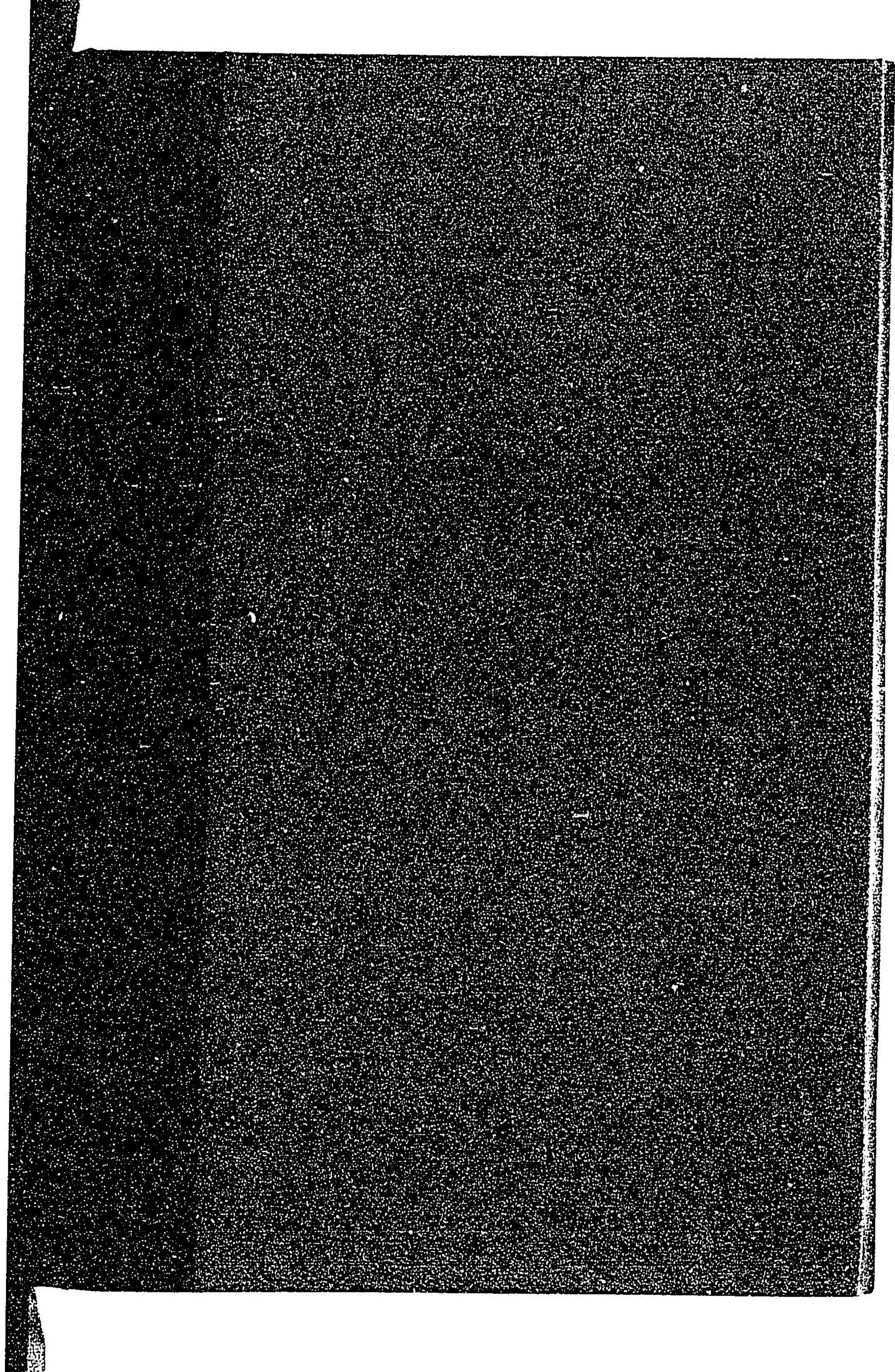
保羅の生涯と其著書



325

105







325

U 7

020746-000-7

325-105

商人の宗教

竹内 甚吉/著

M43

ABI-0566





